

京都大学附属図書館中院文庫蔵『百人一首抄』（『通村抄』）翻刻

—近世中院家における百人一首注釈の研究のために—

酒井茂幸

I 解題

一 緒言

中院通村は慶安二年（一六四九）に後光明天皇の御前で『百人一首』を講釈した。この折の内容を示す、通村の『百人一首』注釈として、従来、田中宗作・柳瀬万里・日下幸男・田島智子により、後水尾院の『百人一首御抄』の「後十抄に云」（「後十」は通村の院号「後十輪院」の略に引用されている）ことが指摘され、検討が重ねられてきた（一）。ところが、大谷俊太により講釈者通村の講義ノート（大谷は「覚書」と称する）が京都大学附属図書館中院文庫に、聴聞者の近衛尚嗣の聞書が陽明文庫に所蔵されていることが明らかにされた（二）。後者の尚嗣の聞書（以下『尚嗣聞書』と略称）については大谷による影印・翻刻を伴った詳細な考察がある。よって本稿では、前者の京都大学附属図書館中院文庫蔵『百人一首抄』（以下『通村抄』と略称）について、本I解題において書誌や先行注の受容、注釈史的意義などについて考究した上で、II翻刻に全文翻刻を付載した。

二 通村の『百人一首』講釈と後水尾院

慶安二年三月から五月にかけ、通村が禁中において『百人一首』の講釈を行った事蹟は、夙に大谷俊太により聴聞者の一人近衛尚嗣の日記『尚嗣公記』別記により確認されている。宮内庁書陵部蔵本に拠り以下に掲げる。

（三月）十八日丁丑、自今日前内府通村公於禁裏被講百人一首（金十言、本）本院御

幸、入道殿 御聴聞、下官令聴聞量、於小御所被講也（近衛信尋）

（四月）九日戊戌、天晴、今日先日之次百人一首御講尺、十五首（三条右大臣、哥マデ也）、於小

御所被講也

十四日癸卯、天雨降、百人一首御講尺、十五首（平家盛哥、マデ也）、於小御所被講

也

（五月）四日壬戌、天晴、百人一首御講尺十五首（公儀、マデ也）、於小御所被講也

十六日甲戌、天晴、今日百人一首御講尺十五首也、（良通法師、哥マデ也）、清涼殿被

講也

廿日戌寅、天晴、暫時夕立、今日百人一首御講尺十五首也（俊恵法師、哥マデ也）、於

清涼殿被講也

廿四日壬午、天晴、今日百人一首御講尺満座、珍重之至也、於清涼

殿被講之也

*さかい・しげゆき

埼玉大学教育機構非常勤講師

通村の講釈は三月一八日に開始され、七回目の五月二四日に満座・終了した。場所は最初回は小御所で、後の三回は清涼院においてであった。この通村の講釈については、管見によると『禁中番衆所日記』にも次のように見える。

十八日、晴、於小御所中院前右府被講百人一首

九日、晴、於小御所中院前内府被講百人一首、本院御幸、左府御参
十四日、陰、自己刻雨降、有御拜、於小御所中院前内府被講百人一首、本院御幸、殿下、左府御参

講釈に参集したのは、後水尾院・近衛信尋・尚嗣に加え後光明天皇が挙げられる。これ以外に聴聞者がいたのかは不明である。だが、小槻忠利の日記『忠利宿祢記』には、

十九日、晴、昨日は於禁中百人一首講尺、中院前内大臣有

九日、暁雨少下、晴、二条殿へ参、正親町相公江参対面語、今日於禁中中院前内大臣百人一首講尺有之由也

とある。伝聞で禁中講釈を耳にしているに留まり、天皇家・近衛家のみが参加した内々の講釈であつたと思われる。

この折の通村の講義ノートが、本稿で考察・翻刻した『通村抄』であるが、本書については目下幸男の紹介にかかる^③、京都大学総合博物館蔵中院家文書中の、通村の孫中院通茂筆「和歌覚書」に以下のような記載がある。

百人一首ハ後光明院之時読申候、覚書仕其本焼残候、後水尾院御抄出来之時進上候て、此分ハ御抄ニ被載候、百人一首・詠哥大概も私宅にてハ幽斎抄ニテ読申候、詠哥大概・幽斎抄も焼残候

内容は次の四点に要約し得よう。Ⅰ後光明天皇の折に講じた「覚書」し

た本は、火災〔万治四年禁裏火災の仙洞類焼か^④〕でも焼け残り、Ⅱ「後水尾院御抄」が出来上がった時に院に進上し、Ⅲその部分は同御抄に収載され、かつⅣ通村は『百人一首』・『詠歌大概』は私宅においては「幽斎抄」で講じていた、というのである。後水尾院の『百人一首御抄』には「後十抄」として通村の説が引かれていることは前述したとおりで、先学にも指摘があるが、通村の「覚書」が後水尾院に進上されたとする件りは注意される。現存の『通村抄』にはこれとは別にかつては進上本ともいふべき伝本が存在したのであり、『通村抄』の前半に多くの本文の省略があることは、秦上本を写した手控えであつたことを窺わせる^⑤。そして、通村は私宅において「幽斎抄」により『百人一首』を講じていたとするのは、『通村抄』における『幽斎抄』の縦横な引用との関連を指摘し得ると共に、通村が先行注の中でも『幽斎抄』を重視していたことが分かる発言である。

次節では、『通村抄』の書誌を掲げ、注釈本文の概要について述べたい。

三 書誌と本文

書誌は以下のとおりである。

函架番号・中院／Ⅵ／一四五。縦一五・二糎×横八・〇糎。折本二冊。

香色無地の表紙。二冊目に白銀笹葉・湧雲の文様が見え、一冊目は磨滅か。外題・内題なし。墨付第一冊六七丁、第二冊六八丁。本文料紙は楮紙。「京都帝国大学図書」の方形朱陽印記と黒の受入印。楮紙の袋に収納される。奥書に「慶安第二抄之於／御前講之」とある。この奥書が存在により本書が慶安二年の後光明天皇の御前での講釈に関わることが判明する。

後水尾院の『百人一首御抄』に引かれる『通村抄』は、先行注に見えない固有な注釈の箇所であり、先行研究では通村の注釈の独自性が強調されてきたきらいがある。だが、全体像を見わたすと、夙に大谷俊太が巻頭の天智天皇歌において明らかにしたとおり(6)、『宗祇抄』・『幽斎抄』及び三条西公条の説とされる京都大学附属図書館中院文庫蔵『百人一首聞書』(以下『公条聞書』と略称)などが参看されており、諸注集成の様相を呈している。

まず、『通村抄』には『宗祇抄』が「祇注」「祇」とした上で引かれているのが目立つ。さらに、こうした出典明示のないまま引用される箇所が散見される(1・3・9・24・43・45・46・50・51・53・55・57・61・70・75)。

次に『幽斎抄』の引用がある。通村が見ていた本は、現存の彰考館蔵本が最も近いと思われる(6)。「抄」として引用されるが、その断わりなく引かれている箇所も多くある(1・2・4・6・8・9・10・12・15・24・30・38・39・42・44・48・49・53・58・60・64・67・79)。「幽斎抄」が『公条聞書』の公条説を取り込んでいることは先学指摘があり(7)、両者が一致する場合は、86番歌に「抄又抄大略同之」とあるような処置が成されている。

また、『通村抄』では、「或抄」「或」「抄」として『公条聞書』が引かれ、そして、「或抄三」「或三」「三」とした上で『公条聞書』の頭注や付箋の実枝説が引かれている。『宗祇抄』・『幽斎抄』同様に特に断わりなく引用されている箇所も部分引用も含めればかなりある(1・33・38・39・42・44・48・54・56・57・58・59・62・64・78・90)。「公条聞書」には、京都大学附属図書館中院文庫蔵本と京都大学文学研究科図書館蔵本の二本が存するが、校異を辿っていくと、『通村抄』が依拠したのは前者と思われる。

例えば、82番歌の頭注に、

きえやすき命さへかゝる二さても涙はモロキ物と也

が附属図書館蔵本では頭注の冒頭に書かれ、引込線で末尾に移動させており、文学研究科図書館蔵本では末尾にあるが、『通村抄』の引用では冒頭にある。同じく82番歌の付箋の、

我身より外の物なる涙かな心をしらはなとこほるらん 道遙院

が文学研究科図書館蔵本では59番歌の注釈部分にあるが、『通村抄』では82番歌の位置にある。なお、従来指摘がないが、『百人一首御抄』で「或抄」として引かれているのは『公条聞書』である。中世の公条の説が、『幽斎抄』を経てなお近世堂上派の『百人一首』研究に影響を与え続けたことは注目される。

以上、本節では『通村抄』が先行の古注釈の引用を基盤として成立していることを述べてきたが、そのこと自体は『通村抄』注釈の独自な側面を否定するものではない。次節では実枝・幽斎から後水尾院に至る、『百人一首』注釈史における『通村抄』の意義を考えてみたい。

四 意義

『通村抄』には「箋云」として注釈が施される箇所があるが、『百人一首御抄』には通村独自の注としてそのまま引かれている。ただ、これは三条西実枝の説のようである。

まず、6番歌について「箋云」より前を含め掲出し検討してみたい。
新古今
6かさゝきのわたせるはしにをく霜のしろきをみれハ夜ぞ深にける

淮南子
七夕ニ鳥鵲橋ヲナスト云事アリ、其橋ニハ非ス、是ハ只空ノ事也、
月夜謡
祇之鵲之事同上、かやうノ事ハキカネハ事ノ外大事ニキケハ、余ニ

安ク心得ルニヨリ、人ノ信モ浅クナレル事也、サレハ書アラハサス、箋曰八雲御抄ニかさゝきのわたせる橋ハ、只雲のかけはし也、誠ニアルニ非スト云ヘリ、此歌ヲ心得サル人、種々ノ説ヲカマヘ出ス、甚不可然歟、釈。名ニ霜露ハ陰陽之氣、陰氣勝則凝ヲ為霜ト云リ、サレバニヤ陰氣^{イシキ}追テ曉ニ到ザレハ、霜ハヲカヌ物也

『通村抄』が否定している、「鵲の橋」を七夕に渡す物であるという説は、『公条聞書』に見える。

七夕にいへるは又各別の事也、鳥鵲^{淮南子}為^ル橋ト云事は、是は七月七日鵲と云鳥ノ来て、為^ル橋て織女を渡スト云事なり、此歌の鵲ノ橋と云は、冬深ク成テ月もなく一天ノ雲晴たる夜霜は、天に満、と^ハ曉ノ寒タル夜の事也、夜嵐ノ吹尽してな^ラては霜は置ぬ者也、月落^テ鳥啼^テ霜満^テ天^ニの心也、橋に置霜といはん為也、只空を鵲と云なり。霜置タル空の雲ノ梯也(以下略)

前半で七夕に鵲が来て橋と成つて織女を渡するとする一方で、鵲を空、雲の梯とする『通村抄』に繋がる説も提示している。そして、本注釈頭注に、

三亜説、八雲ニモ鵲の雲ノ梯トよめり

と、『通村抄』の「箋云」と照応する記事が見出され、これが実枝の説であつたことが分かる。『通村抄』には『宗祇抄』への言及もあるので、『宗祇抄』の該当箇所を掲げてみよう(8)。

此鵲の橋の事、七夕にいへる義にハ相違せるにや、かやうのことハさかねハ事のほか大事にきけハ、あまりにやすく心得るにより、人の信もあさくなれる事也、されハかさあらハし侍らす

公条が鵲の橋を七夕のこととしたのに対し、『通村抄』は『宗祇抄』に

戻り批判しているのである。

次に、7番歌の「箋云」を含む注釈を見てみたい。

祇云^ハふりさけみれハトハ、フリアフギテ見ル義也、但當流ニハ提テナト云如ク手裏ニ入テト心得ル也、祇云^ハふりあふク義ハ勿論ナレ共、此心ハもろこし人ノ名残ヲ惜ム比、月明ニ青天クモリナキニ、吾朝ノ三笠ヲナカメツ、ケタル心、よろつヲ手裏ニ入タル様ナレハ、カク云ヘリ、クレ^ハ此哥ハ、もろこし人ノ名残、天原吾国ノ三ヲ思入テ見ルヘシ、長高ク余情限リナシト也

箋云師云コ、ヲ唐朝ト云共、是コソ吾朝ノ三笠ノ山ノ月ヨト云也、ふりさけハ提也、吾物ニシテ見ル義也、万ニ振放トカケリ、放ハホシイマ、ト読字也、我物ニシタル義一決也、ふりあふクノ義ハ、他流ノ説也、況や貫之土佐ノ日記ニあを海原^{フリサケ}ふりさけみれハ云、万三長哥、するかなるふしのたかねを天原振放^{フリサケ}みれハわたる目の影はかくろひー云、赤人長哥

『宗祇抄』では「ふりさけみれは」を「振り仰ぐ」意とするが、「箋云」以下では「他流の説」とこれを退けている。『宗祇抄』の本文は以下のとおりである。

ふりさけみれハとハ、ふりあふきみる義也、但當流にハ、提てと云様に心得る也、ふり仰ク義ハ勿論也、されとも此心ハもろこし人の名残をおしむころ、月ハ明にすみわた^リて、天つ空くもりなきころ、我朝の三笠をなかめつ^ハける心、よろつを手裏に入たる様なれハかくいへり、くれ^ハ此哥はもろこし人の名残をもとより、天のハらをも我國の事をもよく思入て、見侍るへき事とそ、長高ク余情かきりなし

『通村抄』が忠実に引用していることが分かる。また、『公条聞書』には、

歌ノ心はふりさけみればとは振放ヲツ取て、提タルやうノ心也

とあり、『通村抄』の「箋云」以下と通底する記載が見出される。

なお、近衛尚嗣が筆記した、陽明文庫蔵『尚嗣聞書』では、

天の原――

詞書ノ内、メイジウ夜(ヨル)になりてトヨメリ、ふりさけハふりあをきてみる心也、当流ハ提ノ心也、わか物になしてみる心也、くれく名残ヲ惜テ我朝ノ三笠山の月よとの頃也

とある。「箋云」以下の注釈が反映されていない。

最後に、26番歌の「祇云」と「箋云」とある注釈をみておく。

26 小倉山みねの紅葉ゝ心あらはいま一たひのみゆきまたなん拾遺

祇云は亭子院大井河ニ行幸アリテ、行幸もありぬへき所也ト仰給ニ、事ノよし奏せんカ申テ、此哥を讀メリ、心ハ行幸ノ事ヲ申サンハ、其恐レアレト、紅葉ニおほせ云ヘル事尤珍重ニヤ、歌ノ様凡俗を離レテいかめしくキコユ云、

箋云此百人一首ハ小倉山庄ノ色紙ナルニ、此哥自然ニ定家卿ノ本意ヲノヘタルナルヘシ、此歌撰入ラル、事、哥からハ勿論ナレ共、我身数ナラハ、みゆきモ待見ルヘキ物ヲト、山モ同シ小倉、紅葉モ同シ紅葉ナレハ、下ノ心ハさながら貞信公ニ通シケルトソをしハかられ侍る

「箋云」以下は本書の別名「小倉山庄色紙和歌」の根幹に関わる注であるが、『公条聞書』には一致する記載が見出されない。ところが、後水尾院の講釈を廷臣が聞書した、国立歴史民俗博物館蔵高松宮旧蔵『百人一

首聞書』に以下のようにある(9)。

さて、三光院義、此百人一首は、小倉の山庄の色紙の歌しや、此をくら山のみねの紅葉々の歌は、自然に定家本意をのへたやうなことであらふず、それによりて此歌を別してゑらひ入た物であらふず、歌からの殊勝な事は勿論なれとも、下心かあらふず、定家、我見数ならば、みゆきをもまたふする物をとの下心也、山もおなし山、紅葉もおなし紅葉しやほとに、我身数ならば行幸をも待つけうする物をと、下心さながら貞信公に通しさう也

院がどこから三光院実枝の注釈であることを知り得たのかは明らかではないが、「箋云」以下が実枝の説であることが判明する。

このように、『通村抄』は『公条聞書』の説を独自の観点から再検討すると共に、中世末期に三条西家に蓄積されていた家説を禁中にもたらし、さらには後水尾院に継承した意義を有するのである。

五 おわりに

『通村抄』は『宗祇抄』・『公条聞書』・『幽斎抄』等の先行の古注釈の引用を基盤としていた。一方で、それらの解釈を独自の観点から再検討すると共に、中世末期に三条西家に蓄積されていた家説を禁中にもたらし、さらには後水尾院に継承した意義を有するのである。

注(1) 田中宗作『百人一首古注釈の研究』(桜楓社、一九六六)、柳瀬万里

「中院通村の百人一首注釈」(『城南国文』第三号、一九八二・一二)、日下幸男「中院通村の古典注釈」(『みをつくし』創刊号、一九八三・一)、田島智子「カリフォルニア大学バークレー校所蔵『後十抄』」(詞

林』第七号、一九九〇・四。

- (2) 大谷俊太「中院通村講・近衛尚嗣記『百人一首講尺聞書』考説(上)(下)」(『叙説』第二六号、第二七号、一九九八・一二、一九九九・一二)。以下大谷の見解の引用はこの論文による。なお、吉海直人編著百人一首注釈書叢刊第一卷『百人一首注釈書目略解題』(和泉書院、一九九九年)にも論及がある。大谷には「中院通村講・近衛信尋記『百人一首聞書』について」(『奈良女子大学文学部研究年報』第四四号、二〇〇〇・一二)もある。

(3) 前掲注(1) 日下論文。

- (4) 万治四年の禁裏火災では後水尾院仙洞御所も類焼し、多くの古今伝受資料を失っていることが、陽明文庫蔵・近衛基熙『伝授日記』により知られる。新井栄蔵「影印陽明文庫蔵近衛基熙『伝授日記』」(『叙説』第九号、一九八四・一〇)に影印が供されている。また、田島公「近世禁裏文庫の変遷と蔵書目録―東山御文庫本の史料学的・目録学的研究のために―」(田島公編『禁裏・公家文庫研究』第一輯、(思文閣出版・二〇〇三) 参照)。

(5) 吉海直人は「本書は後の後水尾院抄に引用された『後十鈔』の原本(通村自筆之講釈覚書)と考えられる」とする(前掲注(2) 吉海編著)が、首肯し難い。

(6) 荒木尚編百人一首注釈書叢刊第三卷『百人一首注・百人一首(幽斎抄)』(和泉書院、一九九二)に解題と翻刻が備わる。

(7) 有吉保・位藤邦生・長谷完治・赤瀬知子編百人一首注釈書叢刊第二卷『百人一首頼常聞書・百人一首経厚抄・百人一首聞書(天理本・京大本)』(和泉書院、一九九五)「京都大学中院文庫本百人一首聞書」

解題(赤瀬知子執筆)。なお、本書の引用は同翻刻に拠る。

- (8) 宮内庁書陵部蔵『百人一首』(文明十年本)に拠った。澤山修『百人一首古注釈研究―「文明十年本」・「応永抄」本文と研究』(雁回書房、二〇〇二)を参照した。

(9) 島津忠夫・田中隆裕編百人一首注釈書叢刊第六卷『後水尾天皇百人一首抄』(和泉書院、一九九四)の翻刻に拠る。

II 翻刻

【凡例】

漢字・仮名の別、仮名遣・傍書・割注・小字等は原文のままとしたが、通読の便を図るため以下のような処置を施している。

1 旧字・異体字はおおむね常用漢字に改めた。

2 最小限の読点・中黒を付した。

3 原文の誤写のため意味が通じない箇所には、右傍に(ママ)とした。また、不自然な空白には(アキマ)と記した。その他私注は全て()で表記した。

4 半丁の改丁を丁で表し丁数と表・裏を行間に「1才」「1ウ」の如く略掲した。

5 『百人一首』の歌の頭に通し番号を付した。

6 和歌の引用は原則として二字下げとした。

7 合点は「」の表記で統一した。

8 頭注は【】でくくりポイントを上げて示した。

9 墨滅は■で表示し、消された文字が判読できる場合には右側に()で記した。

10 虫損で判読できない場合は□で示した。

【本文】

此百首ハ定家卿^少山庄色紙形也、彼山庄ノ事ヲ

山家松、しのはれん物ともなしにをくら山軒はの松そなれて久しき 権

大納言家卅首中 山庄ノ躰ヲヨメリ

又正治院百首山家ノ中 露霜のをくらの山に家あしてほさても袖のくち

ぬへき哉 同卿詠也

此百首ノ發起新古今定家卿ノ心ニ不叶事、先花忘実、其趣明月記ニ粗見

エタリ、此道ハ古ヘヨリ世ヲ治メ、民ヲみちひく教誡ノ端タリ、然ニ

新古今ハ偏ニ花ヲ本^ニシテ実ヲ忘レタルニ依テ、本意ナラサルヘシ^云

と

一新勅撰ハ実ヲ根本トシテ、花ヲ先キトセス、是新古今ノ花ノ過タルヲ

をすへきノ為ニ、カヲ入テ実ノ有哥ヲ入ラル

古今集ハ花実相對ノ集也 過不及ノ二集ノ中庸――

詠哥大概 風 是ハ秀逸 二家ノ眼也

一作者之事未不可漏脱也、人^モ被除之、又其名不審之人モ被入之、此事

諸人ノ不審アル事也、但定家卿ノ心世ノ人ノ思フニかわれるなるへし、

又古今ノ哥よみ不知数待れハ、世ニ聞エタル人モ可漏事無疑、それハ

世ノ人此心に「ゆづりてさしをかれたるなるへし、されハしめておと

すにハあらさるへし、さて世に有とも思はぬ人を入らるゝハ、其作者

ノ名誉あらはるゝ間、尤私なき仁ノ道ト云ヘシ

一此百首黄門ノ在世ニハ不流布

古人五十人、今人五十人ノ作者ナレハ、漏脱ノ人数ヲ知ラサルヘシ、

然レハ彼ヲ捨是ヲ取ル事、世ノ褒貶ヲ遁ルヘキニアラス、彼秘シ置カ

しる尤ノ儀也、為家卿ノ時人あまねくしる事ニハなれりトソ^云

一此哥ハ家ニ口伝スル事ニテ、談義スル事ナカリシヲ、東野州^平常縁初メ
テ講セリ^云

此抄ハ宗祇古今未伝受以前也、仍異説多之、全ハ不可信用、古今――

此――口伝有之事也、然共初学ノ人邪――還テ道ニ背ク間、今本説――然

ルヲ子細ヲ不知之人祇説ヲ――^事

抄此内或ハ哥ノめてたき、或ハ徳アル人ノ哥ヲ入ラル、又当座ニふとよ

みたる哥ノ、奇特ナルヲ入られたり、当意即妙ノ哥ハたとひ堪能なれ

とも、常ニ道ニ心ヲかけぬ人^ニ人ハ、説出へきにあらず、此心を感じ

て撰入られたり、此百首ハ二条家ノ骨肉也、是等を以テ俊成定家兩卿

ノ心をもさぐり知へき事とそ師説侍りし

（七分分空旨）^三

（半丁分空旨）^三

ミコトマウキ

命ワケノ

人宇卅九代○天智天皇 諱葛城 天開別尊ト申ス

第一

ヒラカスカケノ イ本

在位十年 近江大津宮 志賀郡

人皇卅五代

舒明天皇

卅九代

天智

御母皇極天皇

天武

茅渟王^女 女帝

卅六代

卅八代

持統

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

天智第一皇女 天武后

大化十年壬戌十二月三日崩五十八才

号近江帝 又葛城天皇 又田原天皇

四十一代女帝

四十一代女帝

四十三代女帝

元正

同第四皇女

舒明后
後即位
皇極 齊明

廿六代
孝德 有間皇子^{4才}

推古天皇廿二年誕 孝德天皇元年乙己 月 日為太子

二代太子也 孝德^{卅七} 皇極^{卅六} 齊明^{卅八}

皇極重祚也

辛酉年齊明崩、以來皇太子厚至孝不称即位

六年^{丁卯}三月遷大津宮^{遷遷于近江國}、壬戌年以來於岡本宮攝政六年、日本紀第廿七云

七年春正月丙戌朔戊子皇太子即天皇位

注云或本云六年歲次丁卯三月即位

元年唐人・新羅人伐高麗、^{ミカト}乞救國家、夏四月鼠彥於馬^馬尾、^{ミカト}積道顯占^テ

曰北ノ國之人將附南國ニ、蓋高麗破而属日本乎^{4才}

三年二月己卯朔丁亥定二十六階^{サキトスベシヲ}制衣令記ニ無所見

同年於對馬嶋・老岐嶋・築紫國等置防与烽

(八行分空目)

1秋の田のかりほのいほのとまをあらみ我衣手ハ露にぬれつ、^{後六}

惣テ東常縁ハ表ノ説ヲ先読テ聞セテ、執心ノアル者ニハ、本説ヲ読^{後二}

テキカセタルト也、宗祇注ニ刈萱関ノ事ヲ云ハ、表ノ説ヲ聞タル時

ノ注ナルヘシト云^云

刈萱開事――日本紀ニ筑紫ニ防ヲ置トアリ、此事ヲ云

是ハ新羅ト戦アル故也

称名右ノ説天皇母后齊明崩シテ諒闇ノ御製也^云、尤有其理平

かりほの庵一説、刈穂ノ庵一説、仮菴ノいほ刈穂ノ時モ、^{ウツ}「ヲト

一、但猶かりいほの庵宜カルヘキニヤ、重詞也

定家卿
黄門ノ意此御製ヲ卷頭ニ入ラル、故ハ、政道明王ノ徳ヲ褒^{ホムル}義也、

凡天下ノ民ハ國家ノ本也、仍テ百姓ノ字ヲ御宝ト訓ス、春耕夏耘秋

刈冬蔵ム、年中粒々ノ辛苦不可勝斗、此苦勞ハ上二人ノ苦也、万民

ノ歎ハ上二人ノ樂也、王者ノ道民ト俱ニ樂ミ、民ト共ニ苦ム、サレ

ハ疎屋ノ風モ防得ス、露モタマラス民ノ袖ヨリモ、万民ヲ思召御袖

ハ猶ヌレマサルトノ義也、此叡心ノ故ニ、此御代天下治リ、高麗ノ

軍ヲモタスケ給ヘリ^云

元名氏

蚕婦 昨日到城郭 帰来涙満巾 遍身綺羅者 不是養蚕人

憫農 鋤禾日当午 汗滴禾下土 誰知盤中飧 粒々皆辛苦 李紳

第二〇持統天皇 天智第二皇女、諱高天原広野姫尊、又免野、又

鷗野讚皇女 御母越智娘^{大臣藤原石川乙女}、天武天皇后、草壁皇子母

都大和国高市郡、藤原宮、大宝二年十二月十日崩

此御時卯杖・踏歌等始也^云

2^{万一新古本}春過て夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天香久山

【天香久山太山ニ一畫一也】此哥春過て夏きにけらしといへる、勿論ノ様^義

ニ聞エテ、宜からざるやうニ思ふへき也、次第ノ二いひのヘタル

所面白也、二月既破三月已来杜子一カ句也、光陰ノ事也、是ハ更衣

ノ哥也、新古今夏ノ卷頭ニ入タリ、春着霞衣夏来脱衣而如着新衣

衣干ト云本縁事、日攄明神ト云神一

天照大神天磐戸ニ引コモリ給ヒシ時、天兒屋根命ヲ始として、^{7才}「八

百万神たち神樂ナトフして此山ノ榊ヲきりてさゝれし事モアリ、神

樂ノ起リ此所也、大和国高市郡也

又神鏡ヲ奉鑄所敷、仍有神社^云

万葉第一 藤原宮御宇天皇代御製歌

春過而夏來良之白妙能衣乾有天之香久山

大井河かへらぬめせきのをのれさへ夏きにけりと衣ほす也 定家卿
白妙の衣ほすてふ夏のきて垣ねもたはにさける卯花 同卿

第三
○柿本人麿

天智御時人云、口授

3足引の山鳥のおのしたりおのなか／＼し夜を独かもねむ

あしひきの山とつゝく常の事也、此哥別ニ義ナシ、【數反吟味シテ】不
得者】あしひきのト云ヨリ、山鳥の尾トいひ、なか／＼し夜をト云

ヘルさま、いか程も限リナク長キ夜ノ牀也、詞ノツゝきたヘニシテ、
風情尤長高シ、無上至極ノ哥にや侍ラント云

此哥ニ詞ヲつけて云ヘキ様モナシ、人丸ハ古ー独歩スト云ヘリ、
此理に、山鳥ノをろのはつおハ長尾【はつはな長お花同前也】

山鳥ハ夫妻一所ニ宿、似序哥非序

第四
○山辺赤人 聖武御時人云、一説人丸同時人云

山辺赤人ハ垂仁天皇ノ後裔山辺老人カ子ト云、山辺ハ氏也、宿祢ハ
尸也、赤人ハ人丸ヨリハ少一歟、神龜三年聖武帝播磨ノ臥南野ニ

行、読ル哥万葉ニアリ

4田子の浦にうち出てみれハ白妙のふしのたかねに雪はふりつゝ

此哥ハ万葉第三長歌ノ反哥也

山辺宿祢赤人望不尽山歌一首 并短歌

天地之 分時從 神左備乎 高貴寸 駿河有 布土能高嶺 天原
振放見者 度日之 陰毛隱比 照月乃 光毛不見 白雲母 伊去
波伐加利 時自久曾 雪者落家留 語告ギ 言繼將往 不尽能高嶺

者 反歌

【マ白ヲ白妙ニナシ、降けるヲ降ツ、ト改テ新古今ニ入ラル】田兒之浦從打出而見者
真白衣不尽能高嶺尔雪波零家留

此長哥ヲ以テ見レハ、此哥ノ一会其味尤深シ

祇云田子浦ノ無比類ヲ立出テ見レハ、眺望限ナク心詞モ及ハヌ

ニ、況又富士ノたかねノ雪ノ牀思入テ吟味スヘシ、此哥ノ妙処ハ、
海辺ノ景氣たかねノ雪ノ妙ヲ詞ニ出ス事ナクシテ、其利自然ニ備レ

ル尤奇特也、古今序ニモ、赤人ノ歌ヲハ哥ニあやしくたへなりとい
へり、奇特ノ心也

是ハ陸地ノ眺望也、故ニ打出ト云、若海上ニ浮マハ、山ノー、陸
地ニ於テハ、山ノー兼タリ、雖他境其風景不可輕、況山ハ

一海ハ一、絶景不可述言語

又此哥境地ヲ一其理ニ一、如此一切手ヲ一其類ナキニヤ、佳
妙所イハサル一ノ中ニ千言万語自了

三体詩 江南春 杜牧 千里鶯啼綠映紅 水村山郭酒旗風 南朝

四百八十寺 多少樓台煙雨中ト云ルニ其趣相似歟

第五
○猿丸大夫 古伝云官姓時代等不知之云

抄或系図曰用明天皇・聖德太子・山背大兄王・弓削王号猿丸大夫云

祇注云本天武御子弓削道鏡ヲ号云 此説不審也云

就弓削思誤歟云、下野国薬師寺ノ別当ノ事云、道鏡法師也
鴨長明力方丈記 二猿丸大夫カ旧跡アリト云

5おく山に紅葉ふみ分鳴鹿の声きく時そ秋ハかなしき

深山ノー速ク外山ハ遅シ、外山ノー深山ハ落一故ニ、漸は山へ
一出ル時分一踏分ルト云也、山ニ帰ル鹿ニハ非ス、中秋ノ時分ト

見ヘタリ

是ハ秋ノ感ヲ云ヘリ、世間たが上モ秋ノ悲ヒノ深キ時分ヲ云ハ、深山ヨリ―鹿―当位ニハ非ス

俊恵法師立田山梢まはらになるまゝにふかくも鹿のそよくなる哉

此哥ハ季秋ノ心歟、秋深クナレハ又―

奥山の千人の紅葉色そこき都の時雨いかに染らん 土御門院^{10ウ}

猿丸哥古今是貞のみこの哥合^云、元明比人歟

○中納言家持 天平元^{己巳}生大納言從二位旅人男姓大伴^{又名多比等}

【仲哀朝大連大伴健持連 大連之号始於此也、天忍日命之後連臣 之七世孫也】

抄一説天智天皇―大伴皇子^{調大伴姓}―与多^多都堵牟丸^{〔キマツ〕}黒主^{夜須良丸}

大連大伴金村連 仁賢ノ朝為大連、武烈ノ繼体・安閑宣化兩朝猶大連、欽明元年九月

称老婦住老家 在官四十二年

右大臣大紫大伴長徳連 字馬養 或鳥養 金村大連之曾孫^{臣本}

中納言從三位大伴宿祢安麿 大紫長徳之六男^{文徳五一大宝元也}

大宝元三月十九任授從三位、廿一日停中納言、大宝 三十七參議、慶雲二 四廿日中納言、同八月一大納言、元正 聖武朝天平二一大納言、改名淡守、同三三七從二位七月一日薨^{十七イ}

中納言從四位上大伴宿祢旅人 大納言贈從一位安麿一男^{或廿五}

正三 中納言家持 中納言 從二位 衡間督 三木 右大弁 左兵督 中宮大夫^{11オ}

続日本紀延暦元六月戊辰春宮大夫從三位大伴宿祢家持兼陸奥出羽按察使鎮守府將軍、延暦四八癸亥朔庚寅中―從三―大―家持死、死

後廿余日其屍未葬、大伴繼人・竹良等殺種繼事發覺下獄、安驗之事

連家持等由是追除名、其息永主等並家流焉

延暦四八庚寅日薨、廿余日其骸未葬、大伴繼人・竹良^{11ウ}等射殺中納

言從―兼行春宮―陸―鎮守府將軍^{佐藤}

6かさゝきのわたせるはしにをく霜のしろきをみれハ夜ぞ深にける

七タニ鳥鵲橋ヲナスト云事アリ、其橋ニハ非ス、是ハ只空ノ事也、

祇之鵲之事同上、かやうノ事ハキカネハ事ノ外大事ニキケハ、余ニ

安ク心得ルニヨリ、人ノ信モ浅クナレル事也、サレハ書アラハサス、

箋曰八雲御抄ニかさゝきのわたせる橋ハ、只雲のかけはし也、誠ニ

アルニ非スト云ヘリ、此歌ヲ心得サル人、種ノ説ヲカマヘ出ス、

甚不可然歟

積名ニ霜露ハ陰陽之氣、^{（通）}陰氣勝則凝ヲ為霜ト云ヘリ、サレバニ

ヤ陰氣追テ曉ニ到ラザレハ、霜ハヲカヌ物也^{12オ}

満天ノ霜ニ曉ヲ覚ヘタル心さま、可付眼也、凡歌人ハマモル所此哥

ニ有ヘシ、月モナク、何ノアヤメモ分又空ニ起出テ、景氣ナキウヘ

ノ景氣ヲ吟シ出セル哥人ノ妙趣、コ、ニアルニヤ、学者能可思知也

月落鳥啼霜満天ノ心也

【前二可入之歟】同又今案

又泉大將定国ノ隨身ニテ忠岑カ夜はにふみわけこと、さらにこそト

有ル、其興アル事也^{12ウ}

○安倍仲磨孝元天皇御子太彦ノ命ノ後、倉橋磨左大臣始一名仲磨 一説内膳^{第七}

【私吉備人唐龜龜二從使入唐留學、天平七三月帰朝歟】古伝云船守子、從三位安倍

朝衡息云と、又云大納言朝平男云と、兩説共ニ無実云と

江談第三云仲磨説哥事、靈龜二年為遣唐使件仲磨渡唐之後、不帰

朝、於漢家楼上餓死、吉備大臣後渡唐^{仲之}見鬼形与吉備大臣

言談、相教唐土事、件仲丸不帰朝人也、説哥雖不可有禁忌、尚不

快歟如何^{宝龜六十一 前大匠一八十一 13オ}

或記曰仲丸者癸惑星分身也、降和国輔王道、到異国能天文・陰陽、

異朝人怖惡之、令禁固而遂殺、仍靈鬼伏人、吉備丸渡唐之時、見異形教授天文・曆術・算計・儒書令來朝云、仍仲丸孫葉等猶達天文伝其葉云、

陰陽道ノ中ニモ、安倍氏ハ天文道ヲ本トス、晴明等カ先祖也

私此説又難信歟、又於唐朝改姓号朝衡之由説アリ、朝衡ハ仲丸以前之人歟

もろこしにて月をみてよめる^{13ウ}

7^天天の原ふりさけみれハ春日なる三笠の山に出し月かも

左注云このうたハむかし仲丸をもちこしに物ならハしにつかはし
たりけるに、あまたの年をへてえかへりまうてこさりけるを、この
国より又つかひまかりいたりけるに、たくひてまうてきなむといて
たちけるに、めいしうといふ所の海へにて、かの国の人むまのはな
むけしけり、よるになりて月のいとおもしろくさし出たりけるをみ
てよめる、となんかたりつたふる云、

祇云ふりさけみれハトハ、フリアフギテ見ル義也、但当流ニハ提テナト

云如ク手裏ニ入テト心得ル也、祇云ふりあふく義ハ勿論ナレ共、此心
ハもろ^{14オ}こし人ノ名残ヲ惜ム比、月明ニ青天クモリナキニ、吾朝ノ
三笠ヲナカメツ、ケタル心、よろつヲ手裏ニ入タル様ナレハ、カク
云ヘリ、クレ／＼此哥ハ、もろこし人ノ名残、天原吾国ノ三ヲ思入
テ見ルヘシ、長高ク余情限リナシト也

箋云師云コ、ヲ唐朝ト云共、是コソ吾朝ノ三笠ノ山ノ月ヨト云也、ふ
りさけハ提也、我物ニシテ見ル義也、万ニ振放トカケリ、放ハホ
シイマ、ト読字也、我物ニシタル義一決也、ふりあふくノ義ハ、他
流ノ説也、況や貴之土佐ノ日記ニあを海原ふりさけみれハ云、万
三、長哥、するかなるふしのたかねを天原振放みれハ^{14ウ}わたる日の

影はかくろひー云、赤人長哥

第8^{喜撰法師} 作和歌式、一説基泉同人云、又別人云、宇治山隠侶、遺跡在御室戸、鴨長

明無名抄一本橋宗良九子云、一本刑部卿名虎朝臣息云、系図等無所見

8^下わかいはハ都のたつみしかそすむ世を宇治山と人ハいふなり

心ハ明也、人ハ世ヲ宇治山ト云ヘ共、我ハシカモ住得テアルソト也、
此下句人ハいふ也、吟味深シ、しかそすむトハ^{15オ}わかこ、ニ住得タ
ル心ヲ云ヘリ、迷ヘル輩ハこ、ヲうしト云也、誰モ身ヲ治メ、心ヲ
安クセハ、人ト皆喜撰たるへきニや、都ノたつみトハ、方角ヲさし
ていへり

後京極一春日山都の南しかそ思ふ北の藤浪春にあへとは

第9^{小野小町} 出羽郡司当澄女 イ常澄

或説出羽郡司小野良実女、仁明之時人、承和之比云、つれ／＼草云
小野小町か事きハめてさたかならず、をとろへ^{15ウ}たるさまハ玉造と
いふ文ニみえたり、此文清行かけりといふ説あれとも、高野大師の
御作の目録ニ入り、大師ハ承和の始にかくれ給へり、小町かさかり
なる事、其後の事にや、猶おほつかなし云、

9^花花の色ハうつりにけりないたらに我身世にふるなかせしまに

小町古今ニテ第一ノ哥ト也

花ハ毎年サキチレトモ、同シ木ニ咲也、人ハ二度若年ニナラサル也、
人ハ時と刻とニ衰フルモノ也、年と歳と花相同^{16オ}歳と年と人不同、
高歌一曲掩明鏡、昨日少年今白頭ナトノ心也、人ハタトヘハ隙行駒
ノ歩ミノ如シ、漸とニ衰ヘ行物也、なかめせし間ハなかなむる也、但
為氏卿長雨ヲそヘテ、ふかくみよと申されしと也、花時風雨多シノ
心也、又此哥に文字四あれとも、耳にたゝす、天然ノ妙趣也、宗尊

親王御詠二、

白雲の跡なき嶺に出にけり月の御舟も風をたよりに

為家卿詞ニ云に文字あまた指合候歟、小町か花の色ハうつりにけりな——是ハ秀逸ニ候ヘハ何事歟云^{16ウ}

或抄聞古今ノ中小町哥第一ト也、なかめせしまにハ長雨ヲソヘタリ哥ノ心ハ花ノ時分ハ花ニ身ヲなさんと思ひしニ、世ニ住ならひとやかくやとするうちに、はや花ハちるト也、人間皆如此トや、面白キ哥也、人間ハ由断^{ダシ}して、不可住ト云事也、面白クして、然モ眼ノある哥也、花ノ上ヲ云フテ、我身ノ上ヲ云たてたる哥也、小町ハ好色ノ女也、我身ノ世ニふる交ノ隙ナキニ、打返しノするニ、長雨サヘふれハ、花ノ色モうつるひ衰フルヲ打歎テ、移リニケリナいたつらニ【祇注】ト云ヘル也、下心ハ花の色トハ小町カ我身ノ衰ヘ行さまヲ云ヘリ、世ニしたかひ人にあらそひ、世ヲかこちナトスルニより、物歎カシク打なめなどして過る間ニ、我身ノ花なりし姿のおとろヘ行を思ふ由也、此心ハ小町ニ限ルヘカラサル也、人毎ニ如此也、只身上ヲ忘ル、者也、なかめせし間ハ只ナカムル也

会坂蟬丸仁明御時人、道心者也、常ニ不剃頭世人号翁或仙人トモ

第十〇蟬丸 又世人言者ト云誤也、後撰詞書ニ相坂の関にて往來の人をみて云、以之可知也、盲目ト云ヘルハ、見^{ケンシヨク}濁ヲ離ル、義也^{17ウ}

又延喜帝ノ皇子——甚不可然、古今集此人ノ哥

延喜五廿一歳ニテ——

10^{後撰}

これやこの行もかへるも別^ツハしるもしらぬもあふ坂の関
後撰十五雜一 相坂の関に庵室をつくりてすみ侍けるに、行かふ人を
見て云

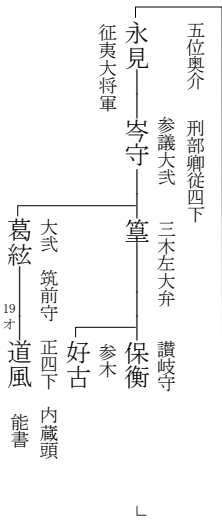
祇云これや此トハ、相坂ニ落つく五文字也、此五文字ニテ逢坂ノ関ヲ治定セリ、表ハ旅客往來ノサマ也、下心ハ会者定離也、行も帰るもハ流転、開ハ関ヲ免ル、義也、万法一如ニ帰スル理リ也^{18オ}宝銓四生盲者不識盲、生とと暗生始、死とと冥死終トアリ、尤可思事也、何カ我何カ人誰親誰疎ト云如クニ、更ニ親疎ハナキ物ナレハ、此迷ヲ思ヒトクヘキニコソ

(四行分空目)^{18ウ}

三木 右大弁

第十一〇参議篁 姓小野 号野相公

敏達天皇—春日皇子—妹子—毛人—毛野^{毛野}又 正三位中納言
エス



11^{嘉祿}

わたの原やそ嶋かけて漕出ぬと人にハつけよ海士のつり舟
古今第九羈旅詞書 おきのくに、なかされける時に、舟にのりて
てたつとて、京なる人のもとにつかハしける 小野たかむらの朝臣
云、
わたの原ハ海ヲ云、八十八多キ心也、イカ程ノ嶋ノ漕ハナレノ
テ、蒼海渺トト行ソト也、只大方ノ逆旅タニアルニ、はるかナル隱
岐国也、此遙カナル遠——流人ノ

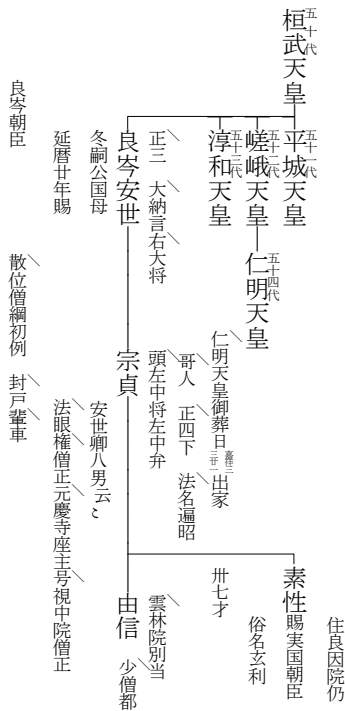
其行所ハ隱岐国トさしてーサナカラ千万里ノ吾国ノ境ー
是流人ノ故也、人にハつけよト云ヘル、其心甚深ナルニや、行平卿
ノわくらハに問人あらハ人にはトハ、アハレト云人ハ、又罪ニアタ
ル物ナレハ、尋ヌル人ハアルマシキヲ、釣舟ナラテハことカヨハス、
人モナケレハ如此ミカケタル也

(三行分空白)

俊成卿此下句姿詞無比類云²⁰

(紙)「わたの原ハ海ヲ云、八十ハ多キ心也、大方ノ人たに海路ノ旅ニを
もむクハ悲しかるヘキニ、ましてはるかナル隱岐国ヘ流人ト成テ、
漕はなる、心堪カタかるヘシ、^{キサマ也} 東今我王対スル物ハ釣舟ハかり也、
所ハ隱岐国トさして行とも、サナカラ千里ー吾国ノ境ヲ漕はなれ
て、しらぬ世界ノ心スル也、是流人ノ故也、人ニハつけよトハ、た
とひあはれと云人有トモ、罪ニアタル物ナレハ、尋ヌル人ハアルマ
シ、サレハ釣舟ニ云カケタル也、いせ物かたりニ、
みるめかる方やいつこそ棹さして我にをしへよ蚤の釣舟」

○僧正遍昭^{第12} 俗名良岑、宗貞、号良少将、出家後号花山僧正、又号良僧正



姓

天台顕密碩才 寛平二正十九入滅^{20ウ}

12あまつ風雲のかよひち吹とちよ乙女のすかたしハしとゝめん
詞書五節のまひゝめみてよめるよしみねのむねさた云²⁰

師云乙女ニ酩酊ニハ舞ヲシ一乙女ノ濫觴ハ清見原一吉野
宮ニマシシ時、一タ琴ヲ鼓シ給ヘハ、アヤシキ雲向ヒノ山ヨリ
来テ乙女ヲ現ス、神女雲ニ乗シテ、【袖フル山モ】此曲ニツキテ舞テ、
御門ノ御目ハカリニ見エタリ、袖ヲカヘス事五たひス、是ヨリ五節
ノ舞姫ト号ス云、其時御門の御哥 此事本朝月令ト云物ニ見タリト
云、

乙女子をもとめさひすもから玉を袂にまきて乙女さひすも^{21オ}

玉たてぬきてイ

【後鳥羽院御時京序六人作者ヲアケテ云ヘル中ニ、いつれそ御尋之時 定家卿遍昭ヲ取出テ
申サル云】只今ノ舞姫ヲ昔ノ神女ニシテよミナセリ、此乙女ノ天上ヘ
カヘルヘキ通路ヲ吹とちテ留メヨ也

後鳥羽院 建仁三三廿五大内ノヲ密と御覽ノ時

天つ風しはし吹とちよ花とみえ雪とちりまかふ天の通路

光孝天皇御時仁寿院ニテ七十賀ヲ給フ、すヘテ名譽多キ人也

(四行分空白)

第十三 陽成院 諱貞明 在位八年 清和第一皇子 御母二条后高子

天曆三九廿九落飾入道 第一皇子兵部卿

○文德天皇 清和 陽成 元良親王

法諱

13後撰

つくはねの嶺よりおつるみなの河恋そつもりて涸となりぬる
後撰 詞書つりと、みこにつかはしける、陽成院御製云、

祇云ほのかに思初シ事ノ深キ思ヒニナルヲ、幽カナル水ノ積テ測トナルニタトヘ云也、惣ハ序歌哥ノ心ハ是マテ也、サテ君ノ御哥ニテ面白キ故アリ、天子ノ御心ニハ少ノ事モ思食事ニ、善ハ天下ノ^{22オ}徳トナリ、悪ハ天下ノ愁ヘトナル也、大方ノ人モ又此心ハ思フヘキニヤ、師云ソト思ヒソムルト思フ事力深クナリ来レルト也、源浅キ水ナレ共、ツモ¹ー¹是万事ニ¹ー¹一善ヲタクハフレハ、天¹ー¹悦¹、一悪ヲナセハ¹、故ニ微漸ヲツ、シメト¹ー¹天子一人ニ¹ー¹万民¹ー¹

箋曰筑波根事八重ニ惣シテ嶺ヲ云一説也、名所ノ部ニハ入ラル、みな^{22ウ}の川八雲名所部ニハ入テ、国名シルサレス
岷江初濫觴 入楚乃無底^{22ウ}

第十四^{五十三代}河原左大臣 源融^{五十四代} 嵯峨第十二 源氏 母正四位下大原全子
嵯峨天皇^{五十三代} 仁明天皇^{五十四代}
左大臣^{五十四代} 源融^{五十四代} 於六条河原院摸塩竈浦之人
源融^{五十四代} 男女皇子五十人之内也

弘仁三年壬辰生 淳和天皇為子 栖霞觀大臣之山庄云、
承和五年十廿五正四下加元服 六年正月侍從

貞觀十四年八廿五人左大臣^{五十二才} 同十五正七從二位
同十三日兼東宮^{陽成院} 同十八十一廿九止伝受禪^{五十五才}

仁和三十一十七從一位^{即位日} 同五年輦車 寬平二奉政事^{23オ}
【或抄云庭与家ニ心^一モ魂トナリシ人也云^一】

同七八廿五薨^{七十四才} 同廿八日贈正一位 号河原左大臣
在官廿四年 公卿旁四十二年

14^古みちのくのしのふもちすりたれゆへにみたれそめにしわれならなく
に

祇云上二句ハ乱ルノ序哥也、惣ノ心ハ誰ゆヘニカ乱レ初メニシ君故ニコソト云ヘル心也、師云奥州ノ忍ふノ郡ノすり也、我思ヒノ乱レタルハ誰故ゾトカコチ懸タリ、古今十四ニハみたれんと云、伊勢^{23ウ}そめにし也、同心也、心ヲ用力ヘタリ^{23ウ}

第十五^{五十四代}光孝天皇 諱時康 仁明第二御子 在位三年 号小松帝 母同宗康親王
仁明天皇^{五十四代} 文德天皇^{五十五代}
宗康親王^{五十五代} 母贈皇太后藤沢子 贈太政大臣總繼女
光孝天皇^{五十五代}

天長七庚戌降誕、承和三正七叙四品、同十二年十二月元服、同十五正月常陸太守、嘉祥三三中務卿、仁寿元十一廿一三品、貞觀六正十六上野太守、同十二七二品^{四才}、同十八 十月式部卿^{24オ}、元慶六正七一品^{五十四才}、同八正月太宰帥、同二月四日受禪^{五才}、仁和三八廿六讓位即崩^{五才}、九月三日葬に松山陵

15^歌君かため春の野に出てわかなつむ我衣手に雪ハふりつゝ
詞書二仁和のみかとみこにおましゝける時、人にわかな給ひける御哥トアリ、若菜給ふトハ賀ヲ^一誰共ナシ、人日ニ菜羹ヲ服スレハ、其人万病邪氣ヲ除クト云、仍七種ノ菜羹ヲ供スル也、賀ノ事ニ聞用タリ^{24ウ}

源氏物語ニ若菜上下ノ卷モ^一ー^一
哥ニ有心杼アリ、無心杼^一ー^一此御製ハ有心^一ー^一
是ハ臣下ナトニ若菜ヲ給フ時ノ御哥也、春ノ始ナレハ、余寒ノ時分雪ヲ打払ヒ^一若菜ヲ摘心也、雪ハ艱難ノ方方也、如此辛勞有テ、御憐愍ノ義也、下モヲメクマル、御心アラハレタリ、是ニ依テ天道ニ叶給ニヤ、五十五ニシテ、俄ニ御位ニツキ給ヘリ、文徳ノみこモ歴々御座アリシニ、清和ノ御治世ノ後、陽成ノ御末モ継給ハスシテ、

文徳ノ御弟ナカラ即位アリテ、今ニ御末不斷ハ御徳ノ深キナルヘシ、
定家^{25オ}卿ノ猶花麗ハカリニテハ無本意故ニヤ、如此心ノ有^一

第²⁶大
中納言行平<sup>在藏見
男佐</sup>

大江音人
中^一 本帥 正二 民部卿 按察 左
兵督

恒武天皇^{三品彈正尹} 平城天皇 阿保親王 在原行平 配流 仁和三致仕

行平・業平・等母 贈一品 母伊登^一
伊登内親王 在藏人 在原仲平 駿河守^{25ウ}

男 在原業平 在五中 母同行平 阿保五

16歌
立わかれいなはの山の峯に生る松としきかはいまかへりこむ
古今 題不知 幽玄^一

稲葉山ハ因州・濃州両国ニアリ、是ハ一國ノ稲葉山也

若有待吾之人者帰来、料知不^一

俊成卿云鑲リ^一結句為一首

因幡国司ノ事 寛弘二 無姓

因幡堂建立力行平ハ大納言ニテ橘氏也云、不審事^{26オ}

【或説結句力行平ノ哥ト言ヘリ、是ハ因幡ノ事也、任力趣ケ時京ノ^一】

○中納言行平 母伊登内親王 桂内親王是也可尋之

天長三年親王上表曰、無品高立親王男女先停号賜朝臣姓、臣之子息

未預改姓、既為昆弟之子也、寧異齒刻之差、於是詔仲平・行平・業平

等賜姓在原朝臣

弘仁九年戊戌生

承和七年正月補藏人、十二月辞退、八年十一月廿日從五下、十年二

月十日侍從

齊衡二年正月七日從四下、同十五日因幡守

貞觀六正十六備前權守、三月八日左兵衛督^{權守、}十年五月廿六日兼備

中守、十二年正十三任參議^{或本年十月、}同廿六兼左兵督^{如元、}為別當、同

十四年八月廿九日遷左衛門督、十月十四日如元為別當、八月廿五日

補藏人頭例^{26ウ}

同十五二十八任太宰權帥、叙從三位、止別當・督頭等職、五十六

元慶三正十一兼備中守、治部卿如元

同六年正月^{十日}任^{六十五}中納言元參議・治部卿

同九年二月廿日兼按察、卿如元^{民部卿、}仁和三廿三到仕七十

按察使民部卿寛平五七十九薨七十六、參十三・別四・頭二・中六・前七

(五行分空白)^{27オ}

第¹⁷七
業平朝臣 系同見 行平以下

從五上 筑前守

左門佐

○阿保親王 業平 棟梁 元方

頭 藏人 右中將 馬頭 從四上 美乃權守

元慶四年正月廿八日卒

古今¹⁷一条の後の春宮の宮す所と申ける時に、御屏風に立田川に紅葉なけれ

たるかたをかけりけるを題にてよめる

○千早振神代もきかす龍田川から紅に水くゝるとは

神代ノ昔ハ現神力得飛行自在、千変万化不可勝斗^{27ウ}

然処今^一面ヲ紅ニ染替テ、水色失其半、是人ノ風ニ非ス、

是人ノ風ニ非ス、神代靈驗ヲ記シ置^一不伝聞、之ト^一不定其

第廿 ○元良親王 第一皇子

陽成院——元良親王 三品兵部卿 天慶二七廿二薨^{三才}

母主殿頭以遠長女

拾遺恋二私題不知ノ哥也

宇多御門御時、京極御息所に忍ひてかよひける、あらはれて後文

つかはしける 私此詞家集歟

後撰恋五十三といてきて後に、京極の御息所につかはしける云^{時公女}

20 わひぬれは今はおなし難波なる身をつくしてもあはんとそ思

師——此五文字深切也、常ニ容易ニハ不可用之

拾遺 わひぬれハつねハゆゝしき織女もうらやまれぬる物にそ有け

る^{32オ}

此初句一意也、我思ノ極マリテ、如何共セヌ時ノ心ノ中ヲ一也、一

タヒ漏脱セシ名ハ、今更改テ不逢トモ、又今逢トテモ同事也、惣時

ハ可惜身ニモ非ス、身ヲ失ナフトモソレニカヘテ又モ逢見ルヘキト

也

聞名ト難——身ヲ——難波縁也^{スモ}

今はたハ将ノ字——カヘリタル也、又ト云ニ用タル哥モ聞 将

祇云ミヲツクシ、難波ニ立ハしめたるト云説アリ、水ノ浅深ヲ——

——此哥ハ幽玄躰ノ哥トソ^{32ウ}

○素性法師 左少将宗貞子、遍昭是也

系図見僧正遍昭下

左近将監

古伝云俗名傳時、又云玄利云

古今十四

詠 21 今こむといひしはかりに長月の有明の月を待出つるかな

他流ノ義長月ノ夜ノ長キ比ノ有明マテ、こぬ人ヲ待ケルト——^{33オ}

定家卿ハこよひ斗ハ猶心つくしナラスヤト云ヘリ

必ト憑メシ人ノ心モ進マスシテ、春——秋サヘハヤ末ニ成ヌレハ、

永キ夜ノ限ナキ比、今夜や——ト待ふかす間ニ、つれなき有明ノ月

ヲサヘ——までも人ハ影——ヨト歎ノキハマリヲ云也

今こんといはぬ許そ郭公有明の月のむら雲の空順徳^{33ウ}

(四行分空白)

廿二〇文屋康秀 字文琳 任参川掾

先祖不見 縫殿助宗子男云

古伝云陽成院御時人云、或中納言朝康子云

古今五

これさたのみこの家のうた合の哥

22 吹からに秋の草木のしほるれハむへ山風をあらしといふらん

家集ニハ野への草木トアリ、嵐ハ秋カ本也、然レ共猶秋に——秋ト

改直シテ入タリ、後京極摂政家会ニ羈中嵐ト^{34オ}ニ云ヲ各雜哥ヲ詠ス、

慈鎮・定家卿等雖被批判、摂政殿モ衆儀ニ用スト——被詠雜——云

【むへ山風ヲ異説ニ山風ハ嵐ノ字也云義アリ不用之、毎木之類也】

嵐ノ字被 哥ノ用ヒ打替歟

吹くからにハ則ノ心也、むへハ宜諾也、ケニモト領解ノ辞也

一向ニ枯野ニナレハ、風ノ力無也、秋ハ千草万木ニ当テ、風ノアラ

キ事ヲおほゆる也

あらしハ荒マシキ也

秋ノ風ノ舐ル所、其当位ニ色悴^{カケ}緑衰之躰也、殺氣タル故也、秋色賦豊

草緑縹而争茂佳木葱籠而可悦草拂之而色^カ変リ木遭^レ之而葉脱^同○夫秋刑官也、○常以肅殺而為心云^{34ウ}

廿三○大江千里 正五下或從五下 伊与權守 兵部大丞

平城天皇 阿保親王 大江音人 千古

在行平 千里^{從五下 古一 後二 新古二 新勅 統告一 玉二}

在業平等^{35オ}

古今四 これさたのみこの家の哥合によめる

23 月みれハちゝに物こそかなしけれ我身ひとつの秋にハあらねと

月ハ陰ノ性対之者必生悲

一天下ノ人ノ一^{秋ノ}只一身ニ限ルニ似タリ

月モ秋モ公界ノ物也、然共見ル人ノ一身ノ上ノ秋也

新古秋上

なかむれハ千々に物思ふ月に又我身ひとつの嶺の松風^{鴨長明}

燕子楼中——秋来只為一人長 大抵四時——就中——^{35ウ}

(二行分空白)

廿四○菅家 北野天神也 右大臣 正三 右大將

贈太政大臣正一位

天徳日命 天照大神第二子 出雲臣 土師連等祖

天徳日命十四世孫野見宿祢、垂仁天皇御宇賜土師臣姓、三世孫身臣

仁徳天皇御世賜土賜師連姓、十一世孫古人等天平元六廿五改賜菅原

姓、私天応也光仁御宇也

延応元^{天應 廣朝ノ文字不詳 武}五月癸卯土師宿祢安人等兄弟男女六人賜姓秋篠【安人ハ兄

古人ハ弟歟】

阿守從四下 遠江介 冊從三侍読 策刑部卿大内記太字頭

勘長官 侍読 策 三木 冊三木從三

宇庭 古人 清公 是善 菅家

本姓土師宿祢 天応元賜 文士大學頭 文章博士 長者

菅原姓 侍読 文徳・清和 一^{36オ}

古今八 朱雀院ならにおハしましたりける時に、たむけ山にてよみけり

24 此たひハぬさもととりあへず手向山紅葉の錦神のまに^京

此度也、旅ノ字ノ説——手向山南都又逢坂ヲモ云ヘル事アリ、聖廟

御幸ニ供奉アリテ、私ノ御幣ヲモ捧ケラレタキ義ナレ共、今度——

邂逅ノ義ナレハ、綺羅ヲ当レヌル事共也、然レハ大方ノ手ノ神ノ感

一モ有マーハ、幸ニ此山ノ紅葉ノ錦こそ自然ノ幣帛ナレハ——ト云

山ノ名自然相応奇特也、惣別万物世ニ満ち————まに——ト云

ヘル此所也^{36ウ}

随意ト書之我山——

少ことりあへぬト云ニ御幸ノサハカシキ心こもれり、君ニ仕フル道ニ

ハ私ヲ不顧由也 祇役遇風謝湘中春色 態儒登

水生風熟布帆新 只見公程不見春

応被百花遼乱笑 此来天地一閑人^{37オ}

此心モ御使ナレハ不私ノ心也^{37オ}

廿五 ○三条右大臣 定方卿 母宮内大甫弥益女

内大臣高藤公一男

閑院左大臣冬嗣公六男 左中將 号堤中納言 刑大從五下越前守、正五下

勲修 良門 利基 兼輔 惟正 為時

寺家祖内舍人 勲修寺内大臣 定国景大將

紫式部^{源氏物語}

高藤

右大臣左大將 号十御門中納言

定方

朝忠

三条右大臣

寛平四三廿二内舍人 同九四九任参議右近衛

承平二年八四右大臣從二位兼行左近衛大將藤原定方六十六

生年貞觀十五癸巳三十七ウ

25 名にしおハ、あふ坂山のさねかつら人にしられてくるよしもかな

後撰十一恋三 女につかはしける云

祇云名にしおハ、相坂とさねかつらトヲかけタル詞也、さね

かつらハ是ヲ引取ニ、しけみナトニ見物ナレハ、いつくヨリ来ルト

モ見エヌ物ナレハ、其ことく思人ノ人ニシラレスシテ来ル由モガナ

ト云也

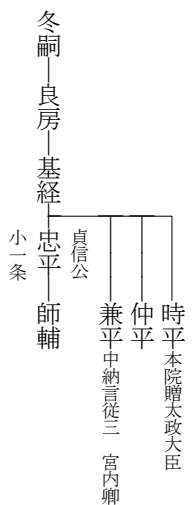
此哥ハ詞つよくシテ、更ニナヤミナシ、一駄ノ哥ト見エ、新勅撰ナ

トニ此風駄哥多ク入、能可廻工夫云

人にしられてト清てよむ説一義也、清濁イツレヲモ用之云

清時ハ心安クコイテト云義也三十八オ

廿六 貞信公 忠平



元慶四庚子誕生七ヶ月不滿十月云

寛平七八十一正五下十六、九月十五日聴雜袍昇殿、同八正廿六侍從、昌泰

五正廿八任参議、延喜九三十春宮大夫左兵衛督、四月九今日氏長者云

、叙從三位任權中納言、九月廿七兼右近大將春美太、同十一年正十三

任大納言大將大夫如故、同十九十二賀四十算、延長二正七任左大臣、同八

年九廿二天皇讓位五十二、勅橋行政事、十月十三辞撰政、同十六重上表

第二度、同十九日重上表第三度、承平二廿九宣旨聴乘牛車出入上東

門、十一月廿六日從一位五十三、同六年八十九任太政大臣五十七、元慶元

五廿閏白如元併准三后詔兵杖五十九、同二年二月廿八日勅任官賜爵並准

三后一如貞觀故事、十一月聴乘輦車又賀六十算、同四年十一月八日詔曰

万機巨細百宮惣已閏白太政大臣、然後奏下一如仁和政事六十二、十月卅

日辞撰政、十一月八日停撰政為閏白、同七年十月廿四給度者五十人依教病也

天曆三八十四薨七十、正月三日致仕即日赦返表、三月十六日重

致仕沈病在小一条亭、八月十六日詔遣大納言清隆・中納言元方・参議庶明等、

贈正一位封信濃国、諡曰貞信公、生年元慶四一庚子、小一条太政大臣三十九オ

撰政十一年・閏白八年

廿六 貞信公

26 小倉山みねの紅葉、心あらはいま一たひのみゆきまたなん

拾遺

祇云是ハ亭子院大井河二御幸アリテ、行幸もありぬへき所也ト仰給

ニ、事ノよし奏せんカ申テ、此哥ヲ読メリ、心ハ行幸ノ事ヲ申サン

ハ、其恐レアレト、紅葉ニおほせ云ヘル事尤珍重ニヤ、歌ノ様凡俗

を離レテいかめしくキコユ云

箋云此百人一首ハ小倉山庄ノ色紙ナルニ、此哥自然ニ定家卿ノ本意

ヲ三十九ウノヘタルナルヘシ、此歌撰入ラル、事、哥からハ勿論ナレ共、

我身数ナラハ、みゆきモ待見ルヘキ物ヲト、山モ同シ小倉、紅葉モ

同シ紅葉ナレハ、下ノ心ハさながら貞信公ニ通シケルトソをしハカ
られ侍る

(三行分空目)

廿七〇中納言兼輔 左中将利基 堤中一

系図三条右大臣ノ処ニ見タリ、承平三三十八薨五十七才

中納言從三位兼行右衛門督 生年元慶元丁酉 40才

27新告、みかの原わきてなかるゝ泉川いつみきとてか恋しかるらん

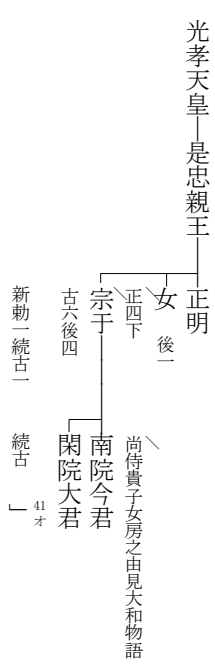
新古恋一 題しらす云

祇云わきてなかるゝハ泉ノ縁ノ字也、泉川ハいつ見キト云シタメ也、
是モ序哥也、心ハふるく見シ様人ノ、今ハ絶ハてゝおほえぬ許ナル
ヲ、猶思ヒヤマス、恋ワヒテ我心ヲセメテ云ヘル也、又一向見タル
事モナキ人ヲ、年月ヲ経テ思ワヒテ、打返シいつみし習ヒニテかく
恋ワタルソト、我心ニ云義モアリ、甚哥ノさまたくひナシ、私新古
恋ノ一ノ哥也、未逢恋ノ心歟

少みかの原ハみかまの原也、昔甕ヲ埋シニ、それに河水ノ流レ入テ、
湧カヘるやうニシテ出ルヲ云也、泉川ハ挑川也、昔此処ニテ戦ヲ
いど^{40ウ}みし事アリ、とトつト五音相通也

廿八〇源宗于朝臣 右京大夫 正四下

一品式部卿



但帝系ニ不見^太或勸物ニ仁明天皇御子本康親王長子云、是又帝系無所
見

古 28 山里ハ冬そさひしさまさりける人めも草もかれぬと思ヘハ

詞書冬の哥とてよめる

山里ハ四時さひしき物也、其中ニモ秋ヲさひしき物に治定して、其
上ニテ所詮秋ハ物ノ数ニモ非ス、冬ノさひしきコソタクヒナキヨト
也、其故ハ木草ノ色モアリ、紅葉ノたよりもアリシヲ、冬ニナリテ
ハ草木のみナラス、人めさヘカレ^{41ウ}ハテタルハト也

或^三さひしさまさりけるといふ所に心ヲ付ヘシ、春の事ハいふニ及
ハス、秋ハ草木ノ色ニつけテ、人目モアリ、尾上ノ鹿又ハ虫ノ声ヲ
聞テモなくさみ、又ハさひしきニ、冬ハさやうの事モナケレハ、さ
ひしきノ至極也ト云ヘリ、木ノ葉モ落^チ、草も枯ハてたるさま也

(三行分空目)

廿九〇凡河内躬恒 古伝云甲斐少目 御厨子所預 先祖不見

延喜七正十三任丹波権大目 後任淡路掾

あハちにてあはとハるかにみし月のちかきこよひハ所からかも
任之時哥也

古今五しら菊の花をよめる

詠 29 心あてにおらはやおらん初霜のをきまとはせるしらさくの花

第二句ハ重詞也、いつれもあらまし事也、おらハ折もこそせめなれ
とも、いつれを菊そ霜そとみ分ぬ心也、さり^{42ウ}「なから花を思ヒしめ
タル心ヨリ推量セハ、折ハそこなふましき也、初霜ナレハ、花とも
霜とも色の分ぬ風情、一入あハれニおもヘハ、霜の置ま^フとハせるを、
心あてにおらはやおらんトハいへる也、菊ヲモ霜をも並テ愛したる

哥也

(四行分空白) 43オ

卅一 壬生忠岑 右衛門府生 泉大將定国ノ隨身
右兵衛府生木工允忠衡子

古今十三

題しらす

永 30 有明のつれなくみえし別より曉ばかりうき物ハなし

此哥他流・当流ノ差アリ、顯昭力心ハ女ニ逢テ帰ル衣ノ曉ヨリ、
有明ト云物カつれなき物ニ成レト見タリ、定家卿さぞ有らんと申
サレシハ、同心ノナキ義也、是ハ逢無実恋也、扶桑葉林集ニ不逢
シテ帰恋ノ類ト云、心ハ逢かたき人ニからう【有明ノ如くつれなき人ゆへニ、
惣寐ノ曉かうめしき物に成レト也】して逢テ、遂ニ其実ナキニ、限アル夜
ナレハ、立帰ラデハ不叶、サテモ徒ニ心ヲ尽シテ、別ル、事ヨト思
フヨリ、曉カウキ物ト成ヌルト也、たとひ枕をならへての衣ノ
タニ、別ル、ハ悲シカルヘキニ、結局不逢シテ帰ル心ノ中ヲ可察也
つれなくみえしハ人ノ事也
別よりハ別から也

はかりト云ハ量字云、心得にくけれハ、程ト云字ヲモゆるす云
44オ

卅一 坂上是則 大内記 從五下 加賀介 御書所預

田村丸―広野―当常―好降―是則―望城 後撰と者五人之内

(三行分空白)

古今六

大和国にまかれりける時に、雪のふりけるをみてよめる

永 31 朝ほらけ在明の月とみるまてによしのゝ里にふれるしら雪

朝ほらけハ早旦也、朝朗・朝開・朝旦・朋旦トモ書之
曉・明・暮・曙・朝次第ノ也、しのゝめのほからノ朗ト云也、
是ハ薄雪ノ色ヲ月ニまかへたる也、山ニアル雪ナラハ、有明の月ニ
ハマカヘられぬ也、里ニふる薄雪ニテ、近ト見サランニハ、まか
ふヘカラス、浅キ雪ナレハ、草木ノ姿モうつもれすシテ、地ハ白妙
ナレハ、月かとみる也、在明の月トみるニよく叶ヘリ、心をつけて
みるヘキ哥也トソ

さらてたにそれかとまかふ山のは有明の月にふれる白雪
おき出て袖にたまらぬ雪ならハ有明の月とみてや過まし
45オ

卅一 春道列樹 從五位下雅樂頭新名宿祢一男

文章博士 正 上 壱岐守 イ出雲守

万二山〇川ト詠ル作例アリ、ソレニハ非サレ共山に川トシテ二ノ景

ヲ興シテ詠也

古今五しかの山こえにてよめる

詠 32 山川に風のかけたるしからみハなかれもあへぬ紅葉なりけり

落葉の隙なく降みたれテ、流モせき返すハかりなるを、しからみと
いヘリ、行水ヲセキトムルトミテ、其上ヨリ見タテタル也、風ノ吹
間ハカリ流レヲ閉ルト見ヘタリ、能モミレハ風力間断モ、さてそれ
を風ノかけたるしからみトはいヘリ、此しからみヲよく見レハ、
風力間断モナク吹カケ、水ノ行ヘキ隙モナク吹シキタル―
山川に風のかけたるしからみの色に出てもぬるノ袖哉
あへぬノ詞ちはやふる神ノいかき―秋にハあへす古秋風にあへす
ちりぬるもみちはの行衛さためぬ袖そかなしき 不堪

新宮内卿
から錦秋のかたみや—— ひとつゝきちる様ノ心
秋とたに吹あへぬ^{46オ}
秋^{46オ}とたに吹あへぬ

卅三〇紀友則 大内記 一本屋主忍男武雄心命 此本十五代孫
孝元天皇 彦太忍信命 屋主忍雄命
メツケノ

武雄心 武内宿祢 木菟宿祢
十二代孫船守

船守 梶長 興道 本道 望行 貫之 時文 後撰と者五人内
中納言 右兵衛 斎衡三藏人 承和比 從五上木工頭 内藏助能書哥人
名虎 有常 女子養老室 有友 友則 大内記
改有人 一本如此 友則^{46ウ} 改有朋 古々

古々 二桜の花のちるをよめる 紀友則

詠
33 久堅の光のとけき春の日にしつ心なく花のちるらん
定家卿云久堅ノ光トハ空の光同、日トツ、キタル也

しつ心なくトハ、花ノ心歟、人ノ心歟ト云不審アリ、両説共ニ用、
心ハ風ノさそふ花ナリ共、ちらハ恨ナルヘキニ、まして春の日ノ優
と空も霞ミわたりて、鳥の声・本草の色モ長閑ナル時節ニ、さく
花ノいそかしけにちるヲ恨たる心ナルヘシ、能く觀せよと也、此哥
はね字なくてはねタリ、上下^{47オ}「句の間ニ、何トテト云詞ヲ入テ、可
心得也、如此たくひ多シ、
變約恋 秋の霜かけゝる松も有物を結ふ契の色かハるらん
季札力劍ノ故事也

(六行分空白)^{47ウ}

卅四〇藤原興風

京家鷹 参議 右京大夫 從三 兵部卿 贈太政 正一 依右京大夫号京家
參木 皇宮亮 從五下 正六上 相模守 治部丞 哥人
浜成 永谷 道成 興風

古々 題知^{48オ}

34 誰をかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに^{48オ}

心ハ我老年ノ後、いにしへより馴にし旧友モ、半ハ泉ニ帰シ、或ハ
参商ト隔タリテ、親ムヘキ朋友ノナキヨリ、アラヌ世界ト思ハル、
ニ依テ、アラヌ趣向ヲ思ヒ出セリ、彼高砂松コソ昔見シ世ノまゝナ
レハ、是コソ友よと思フニ、松モ物いふヘキニアラス、非常ノ事ナ
レハ、打歎て、誰をかもしる人にせんトイヘリ、此高砂ハ名所ヲ指
歟、抄山ノ惣名可然歟云^{48ウ}

卅五〇紀貫之 玄蕃頭 木工権頭 從五上 御書所預 系前ニアリ 或説紀文幹子
童名阿古久曾

古々 一

はつせにまうつることにやとりける人の家ニ久しくやとらて、程へ
て後にいたれりけれハ、かの家のあるし、かくさたかになんやとり
ハあるといひ出して侍けれハ、そこにたてりける梅の花をおりてよ
める

35 人ハいさ心もしらす故郷は花そむかしの香にゝほひける^{49オ}
紀氏家集ニハ昔はつせにトアリ

貫之宿坊ニ中絶、依テ家主かくさたかになんやとりハあるトとかめ
タル心アリ、貫之久シク音つれサレハ、あるしノ心ハみえぬ物ナレ

ハ、しられぬとも花ハ年と歳と時ヲ忘レス咲物ナレハ、いにしへニ
カハル事ナシ、昔ノ香に^{モナク}ほひタル由也

年とノ宿坊ナレハ、故郷ト云ヘリ

いさハ不知也、イサシラスト云訓ナレハ、いさと斗^{ハカリ}ハ不用之、先
達ノ戒也^{49ウ}

卅六〇清原深養父、豊前守房則男云、可尋、先祖不見云、

從五下、内匠允、藏人所雑色、又内蔵記云、

天武天皇 舍人親王 御原王 小倉王 夏野^{左大臣 從一位左大将 双岳大臣}

賜清原真人姓

海雄 房則 業恒

深養父

克三

月のおもしろかりける夜あか月かたによめる^{50オ}

36 夏の夜ハまたよひながら明ぬるを雲のいつこに月やとるらん

或抄称義も、是ハ只夏ノ夜ノ長ノとりあへず明ぬることをかく読ル也、

またよひなるト思てあれハ、明ぬる程二月ハいまた半天ニモあらん

と云るニ、月ノ行多^{月モ入ヌレハカクヨメル也}モ見えねハ、いつくノ雲に力影ヲかくしテアル
ラント云也

書入またよひながら明ぬるヲト我心ニ治定シタル処力感情也、サテ雲

ノいつこニ月ハヤトルラント見タテタル也^{50ウ}

卅七〇文屋朝康、参河掾康秀男云、

先祖不見、延喜比之人云、

或説延喜二年任大舍人允云、

後撰秋中

永 37 しら露に風の吹しく秋の野ハつらぬきとめぬ玉そちりける

吹しくハ散也、頻ニ吹あらき風也、眼前ノ景気也、次第ノ二秋風

荒く成たる躰也、此風ニ草木ノ露ノ乱レ落る^{51オ}、当意即妙ノ哥也、其

躰ヲ心ニ含ミテ見ルヘキ也

玉ハ糸ニテツラヌク物ナレハ、彼玉ヲぬき乱シタルカト云ヘル心也

卅八〇右近、右近少将藤原季縄女云、必女ハ夫ノ名賊父ノ名ヲ呼物也、法中ニモ親

ノ官

拾遺恋四

題しらす

右近

38 忘らるゝ身をハ思ハス誓てし人の命のおしくもあるかな^{51ウ}

是ハ一命をかけテかハラシト契リタルニ、やかて変タル時読ル哥也、

神かけて誓ヒタレハ、神ハ正直守リ給ヘシ、サランニハ、人有まし

き也ト、我わすらルゝヲハ恨すして、人の命ヲおしむ心、尤あハレ

ふかき哥ナルヘシ、此哥ソ誠ニ恋ノ哥ノ本意云、定家卿、

身を捨て人の命をおしむとも有しちかひとおほえやはせん

誓てし命にかへてわするゝハうきわれからに身をや捨らん中納言^{52オ}

卅九〇参議等

天曆五薨

右大弁

正四下、正五上、淡路守

頭、三木ワタス

等、济

後四、後一

嵯峨天皇 弘

希

等

济

マレヲ

後四

後一

マレ或コヒネカフ

後恋一 人につかはしける

39 あさちふのゝしの原忍ふれとあまりてなとか人の恋しき

序哥也、忍ふトいはん為也、なとか詮や、我心ニ忍ふト知タラハ、
なと心にあまりてハ恋しきそト、我ト我身ヲとかめタル哥也、篠原
ニをく露ハ、何ト思ヒテモミユル物ナルニヨリテ云ヘリ、^{52ウ}「浅茅生
ノ小野名所ニ非ス、山城国愛宕二名所アリト云、
四十〇平兼盛 從五上 駿河守

兵部大

從四上文章博士

一品民部卿

山城國從五上

筑前守太式

光孝天皇 忠是親王 興雅王 平篤行 兼盛 赤染衛門

始賜平姓

拾廿一後拾十七

詞六 續後二 續古五至二

王五

拾一^{53オ}

拾遺恋一

天曆御時哥合 平兼盛

40 忍ふれと色に出にけりわか恋ハ物やおもふと人のとふまで

天徳哥合のうた也、一段忍恋ノ哥也、未言出恋忍恋ノ最初也、哥ノ
心ハ明也、折節ノ花紅葉ヲ贈ル歟、或ハたよりヲ求テ、口外ニ出サ
ハ、人ノ知ルモ理リナレ共、一行ノ文ヲモ取カハさぬに、人ノ不審
スルニつけて、さほとまで思よハれるかと打歎キテいへる、尤あハ
れふかし、内ニカヘリ見ルニやましき故也、守心如城郭^{53ウ}」

四十一 〇壬生忠見 本名忠実 忠実男云、

天徳二年任撰津大目

拾遺恋一 此哥巻頭也、忍ふれトノ哥ハ、此次ニ並テ入タリ、仍無詞書

天曆御時哥合 壬生忠見

41 恋すてふ我名ハまたき立にけり人しれすこそ思ひそめしか^{44ト}

同天徳ノ哥合、前哥ノつかひ也、猶上ノ哥ヲ及第トス云、詞つかひ
殊勝云、思ひそめしか、此カ文字不清不濁ニ読テ、^{54オ}「可然、哉ニテ
モナシ、別ノカ文字也、またきハ早速也、昨日・今日人しれす思ひ
初しことノ、ハや名にたつ事よと也

四十一 〇清原元輔 肥後守 從五位上

後撰ノ者五人之内

深養父孫泰光男云、^{頼忠イ}

母筑前守高向利生女

後拾遺 恋四^{54ウ}

心かはりける女に、人にかはりて 清原元輔

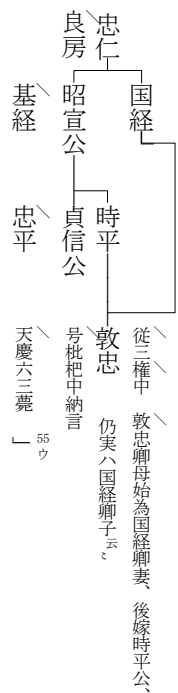
42 契きなかつたみに袖をしほりつゝ末の松山浪こさしとは

此哥ハ古今二、

君をゝきてあたし心をわかもたハ末の松山波もこえなん

是より出たり、此哥ノ本縁昔人有けるカ、此山ヲ浪ノこえん時、わ
か契ハかへらんと契りし事あり、其にてよみたり、心ハか様ニあた
にかはる心なるヲ、互ニ袖ヲしほりて、浪こさしト契りけるよと、
ちとはちしむゆうに云ヘル也、今ハ中ノ心のかはりける事ヲハ一
向不恨シテ、たゝあたる人ともしらて契りしを、^{クイワラ}「悔恨ムル心也」^{85オ}
かたみニハ互ニ也、^(此契)■泰山ハ知砺黄河如常ト高祖ノ云シ心也、末
ノ松・中ノ末・本ノ松トテ三ツ並ヘテ在之云、

四十三 ○権中納言敦忠 母筑前守在原棟梁女 時平公三男 実国経卿子云、



拾遺恋二十二

題しらす

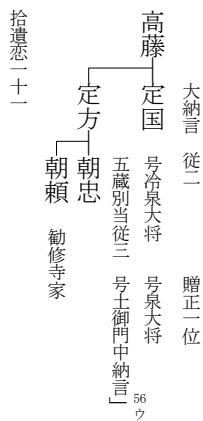
権中納言敦忠

43 あひ見ての後の心にくらふれハ昔ハ物も思はさりけり

哥ノ心ハ人ニいま逢みぬ先ハ、いかにしてカ一度ノ契もと、思フ心
ひとつノ思ヒニテ過ルヲ、逢みて後ハ猶其人ヲあはれト思フ心ノまさ
る物也、逢みてカラ猶恋しさノまさる程モ、只一度ノ逢事モカナト、
昔ニすちに思ヒシハ、物ヲ思ふニテもなかりシト也、惣別世間ノ事
得^レ一^ヲ思^レ十^ヲ得^レ百^ヲ思^レ千^ヲ、無書得物也、次第^ノ二望アル物也、
如此一行ヲ^{56オ}カハシ初テヨリ、漸ニ二思ひノ限無クナルヲカク云ヘ
リ、

あひみでも有にし物をいつのまにならひて人の恋しかるらん
我恋ハ猶あひみてもなくさますいやまさりなる心地のみして
相並テ入哥共也

四十四 ○中納言朝忠 三条右大臣定方二男 母中納言山藤女



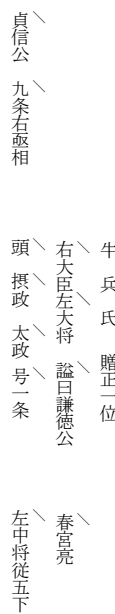
拾遺恋二十一

天曆御時哥合に 中納言朝忠

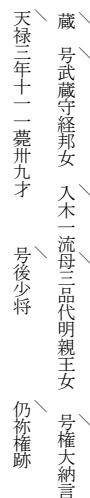
44 あふ事の絶てしなくハ中^ノに人をも身をも恨さらまし

逢事の絶てしなくハトハ、願フヘキ事ナラネハ、中^ノト云ヘリ、
逢事ノアルヨリシテ、ツレナキ人ヲ恨ミ、又我方ヲ悲しムト也、不^レ如
逢傾城ノ色、東常縁云一旦ノ事ニ^{57オ}心得ルハ無曲也、世中にたえて
桜のなかりせハト同意也、中^ノト云事ハ只ハいはぬ也、初文字ニ
ハ殊ニ一向可斟酌云、諸抄一同ニ逢不会恋云^{57ウ}

四十五 ○謙徳公 伊尹撰後撰集之時、藏人少将ニテ和哥所奉行也



忠平 師輔 伊尹 義孝 行成



拾遺 恋五

物いひ侍ける女の、後につれなく侍て、さらにあハす侍りければ

一条撰政

45 哀ともいふへき人ハおもほえて身のいたつらに成にけるかな^{拾ぬへき哉 58オ}

此いふへき人ハおもほへてトハ、公界ノ他人ヲさしテ云ヘリ、我身
数ナラネハ、我ヲ思フ人ハなき也、あはれトモ思フヘキハ、其人コ
ソアレト思ヒタレハ、その人さへよく心ノカハリヌレハ、況や其外
ノ人ハ誰力さやうニハアランスルト、身ヲ侘タル心也、能と吟味
すへしとそ

四十六 ○曾祢好忠 任丹波掾 号曾丹 寛和比人云、先祖不見^{58ウ}

新古今恋一

題しらすノ哥ノ内也

46 由良のとをわたるふな人かちをたえ行ゑもしらぬ恋の道かな

由良渡ハ紀伊国、一段浪ノアラキ渡也、大海ヲ渡ル舟ハ楫力肝要也、楫ノナカランハたよりヲ失フヘキ事也、大事ノ渡ノ舟ニ楫ノナキ如ク、我恋路ハたのむ方モナク、たゞよひうかひテ、行ゑモナキ心ヲイヘリ、由良のとゞ打出るヨリ、長高ク事ガラいかめしき哥也云々

若濟巨川用汝作舟楫ト書見命高宗 殿式一

新古今抄をたえゆらの湊による舟のたよりもしらぬおきつしほ風撰政太政大臣

渡月ゆらのとの行ゑもしらす漕舟ハ月にやいとゞ楫をたえなん雅経卿

四十七 ○惠慶法師 寛和比人 播磨国護師 有家集 先祖不見

拾遺 秋部

河原院にてあれたるやとに秋来といふ心を人々よみ侍りけるに

惠慶法師59ウ

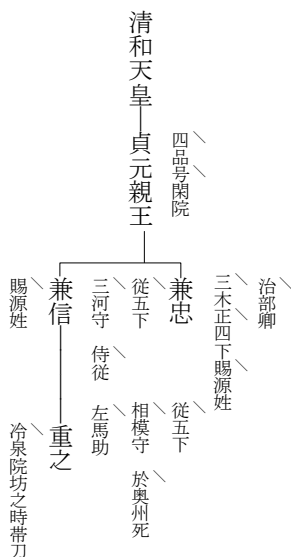
永 47 八重葎しけれ宿のさひしきに人こそみえね秋ハきにけり

抄祇注詞書にて心ハ明に聞エ侍れと、いにしへ融のおとゞノ榮モ夢ノ様ニテ、昔忘れヌ秋のみ来る心ヲ思フヶケテ、此哥ヲハ見侍ヘキ也、人跡絶ハテ、八重葎ノとちタル宿ハさひしカルヘキニ、人影ハ見ヘスシテ、結句わひしき秋サヘ来レルヨト見ルヘシト云々、人こそノこそにつよくあたりて見ルヘキ也ト云々、【新勅ニ入敷、心少カハレリ、春色ノアマネキ心也】此哥貫之か、

とふ人もなきやとなれとくる春ハやヘ葎にはさハらさりけり

よりハあハれもふかく面白キト先達モ云ヘリ60オ

四十八 ○源重之 兼信男 為参議兼忠子



詞花七恋上

冷泉院春宮と申ける時、百首ノ歌たてまつりけるによめる 源重之風をいたみ岩うつ浪のをのれのみくたけて物を思比哉60ウ

人ハつれなくテ、動セヌ巖ノ如クナル心也、我ハ波ノ巖ニあたりテ、くたくる如クナル思ヒト也、根本波モ我ト動ク物ニテハナシ、風の吹出テうこく物也、それハ風故也、さて我トクタクル也、仍風ヲいたみト云ヘリ、かく物思ふも我からト云心也、

袖ぬるゝ恋路とかつハしりなからおりたつ田子のみつかからそ

うき大よとの松ハ61オ

四十九 ○大中臣能宣朝臣 祭主頼基朝臣男 後撰々者之内

天兒屋根命十九代孫

常盤大連常盤

始賜中臣連姓本者ト部也

中臣者主神事之宗源也

可多能祐連公

小徳冠 祭官奏官准三位准大臣 在位十六年

御食子連公

山部哥子連女郎毛古娘腹

大織冠藤氏大祖

祭王大臣小徳冠奏官
国子大連公——国定——意美麿——清麿——今麿

常麿——岡良——輔道——頼基——能宣

從三位 神祇伯
輔親——輔經——親定
女子伊勢大輔

上東門院女房

長元八年從三位、叙日不見云々、八十才、同九十二廿正三位八十三、此後不見
詞花七 恋上

題しらす

大中臣能宣朝臣

49 みかきもり衛士のたく火のよるハもえひるハ消つゝ物をこそ思へ

衛士ハ左右衛門ノ下ニアル衛士也、左右衛門ハ外衛の御垣ヲ守ル也、
公事等ノ時モ火ヲ燒者也、よるハ火ヲ燒キテ守ル役也、心ハ人目ヲよ
クル故ニ、ひるハ火ノ消ルヤウナレ共、夜ハ又もゆるト也、^{62オ}「祇注ニ
昼消ルトハ、思ヒヲ休シタルさま也、胸ニみちタル思ヒノセン方ナキ
ヲ、もゆるニモマカセス人目ヲつゝみ、思ヒけちタル様ニしたる心、
猶くるししまさるへくや、もえつゝ消つゝ、物ヲ思ふトいはんため也

(五行分空日)
^{62ウ}

五十〇藤原義孝 謙徳公三男 母中務卿代明親王女 系図見注□□ 号後少将 右

少将 從五下

後拾遺十二恋二

女の許よりかへりてつかはしたる

藤原義孝

50 君かためおしからさりし命さへなかくもかなとおもひぬるかな

一度の逢事もあらハ、命をもすてんト思ヒシニ、今逢初^{63オ}「テ立別レ
シ名残ノ切ナルマヽニ、其心モいっしか引カヘテ、長久ニシテいく
度モ逢タキト思フ心也、尤あハれふかきにや、思ひある哉思ヒタル
ト云心也

(六行分空日)
^{63ウ}

儀同三司配流者長徳二年四月廿四日事也、宣命趣罪過三ヶ条
法書 左衛門權佐元亮【中宮定子一条院皇后敦康親王の第一皇子也】府生苗忠宗等為
追下向其所^{中宮御所}入自東門經寢殿北就西对^{所也}仰含 勅諭而申依重
病忽難赴配所之由差忠宗令申其旨、無許容載車可追下之由重有勅命
云々

配流太宰權帥正三位藤原伊周^{元内} 出雲權守從三位同隆家^{元中納言}

伊豆權守高階信順^{成忠男 元少弁} 淡路權守同道順^{同弟 元元氏佐 元元氏佐 元元氏佐}

被削殿上簡人々 藤原頼親^{帥會弟}

左近少将源明理 源方理

右近少将藤原周頼^{帥弟}

勘事

左馬頭藤原相尹 彈正大弼源頼定^{命親王男}

於帥候中宮之間、不從使催之由元亮〇再三 奏聞被仰猶健可追下之
由——、隆家同候此宮兩人候中宮^{64ウ}「不可出云、仍下宣旨擬破夜大殿
戸之間、不堪其責隆家所出来也、依称病由令乘網代車遣配所——
於權帥者已逃憑令宮司搜御在所及所々已無其身云々、——此間已經十
ヶ日、五月四日員外帥出家帰本家左衛門志為信^{守藏本 所之者}欲令申事由之間、
權帥又乘車、馳向離宮為信着藁沓於清和院辺追留、此間公家差右衛
門權佐孝道・左衛門尉季雅・右衛門府生伊達等令馳道帥所帰本家、翌

日發向配所權帥依出家^{65オ}被改官符權帥隆家等依病臥赴各配所之由領送使申之、頭弁行成朝臣 勅ヲ奉也、權帥病之時安置播磨國便所出雲權守隆家安置但馬國便所各領國司取其請文可帰参者

被奉射花山院之根元者恒徳公、三女ハ伊周公妻室也【私隆家卿室恒徳公ノ女歟、和泉守季定、母恒徳公女云々】而四女ヲ法皇令通給ヲ、伊周四女ハ僻事也、三女ニテコソアルラメトテ、相統隆家卿被示合不安之由爰中納言安事也トテ、人両三人相具シテ法皇自鷹司殿騎馬令伺給ヲ奉射之間、其矢御袖ヨリトフリニケリ、然而還候了、此事見苦^{65フ}事也トテ、

有秘藏無沙汰之処公家聞食天太上天皇ハ無止事也、而此院御心不論御坐之間、如此事出来雖然不可黙止、又伊周私修大元法件法者非公家等不修之法也、又奉呪咀女院云々、依此等事左遷云々

同年十月八日權帥密々京上隱居中宮之由自去夜有其聞云々、仍差右佐孝道被申事由、於中宮之処已被奏、無美之趣孝道朝臣以下使官人等候、彼宮差季雅・為信等遣播磨被実檢權帥之^{66オ}百無又帥上洛告言、既有其人彼宮大進生昌云々、帥先日依出家被改官符而当不剃頭云々

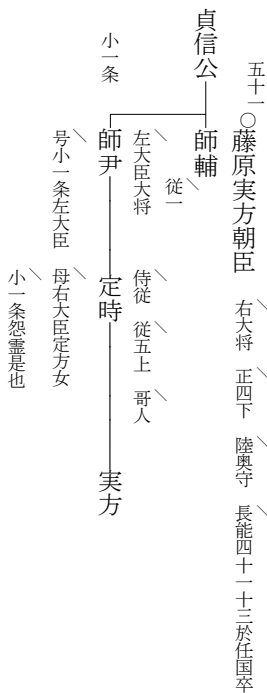
播州使等未帰洛以前權帥候中宮之由已露顯、八旬母氏臣官沈病痾懇切期今一度之対面死ヤラヌウヘ、中宮懷妊今月当産之間、密々上洛云々、於今度慥被追遣太宰府云々、^{同 四月間人被召之云々 上 宮裏 生之故云々 式部卿教の體主}

長保三年閏十二月十六日許木座出仕、公庭被宣下可列内大臣・大納言上之由、寛弘七年正月卅日薨春秋七^{66ウ}

公卿補任伝 于時皇太子伝、四月廿四日坐事左降

長徳二四廿有事左遷太宰權帥進發之間、為通罪科出家入道云、依病留播磨國、而以十一月日 密々入京、仍差右衛門尉平惟時追遣太宰府、同三三廿三給官符召返、十二月入洛、長保三三二十六復本位

正三位、同五九廿一從二位、寛弘三三五宣旨云列大臣下大納言上朝参者、十一月十三日宣旨預 朝儀于時大納言權帥、五月十六准大臣給封戸、同六正七正二位、二月廿日宣旨無召不参大内、依呪咀事也、六月十九日宣旨更聴朝参被恩免、同七正廿八己卯薨^{67オ}、号帥内大臣、又儀同三司^{67オ}



後拾遺十二恋

女にはしめてつかはしける 藤原実方朝臣

51 かくとたにえやはいふきのさしも草さしもしらしなもゆる思を

伊吹山近江・美濃両国ノ名所也、歌枕名寄ニハ近江国ニ入也、^{1オ}「美濃国ニ不入之、而注云左志母草ヲ詠伊吹山下野国在之、見坤元義云、然異説両国共載之云」

冬、冬ふかく野ハなりにけりあふみなる伊吹の外山雪ふりにけり^{降ぬらし} 好忠
雪をわけおろすいふきの山風に駒うちなつむ関の藤川^{秀能}
近江国ニテハ小郡、美濃国ニテハ不破郡也云々、又さしも草ハ美濃ノ心ニ読リ云々、さしも草ハ此山に読ならハしたる也、

六帖 あちきなやいふきの山のさしも草をのか思ひに身をこかしつゝ
さしも草^{1ウ}
えやはいふきとハ、えもいひかたき也、胸中ニあまる思ヲモ、えい

ひやらねハ、さしも人ハしらしと我思ひノ切ナル心ノ、やる方なき
ヲいひのヘタル也

(行分室目)

此実方行成ト同時殿上人ニテ、於殿上口論ノ事アリ、此事ニ依テ実
方ヲハ哥枕見テ参レトテ、陸奥守ニ成シツカハサレシ也」^{2才}

五十一 ○藤原道信朝臣

恒徳公 母謙徳公女

九条右丞相

太政 從一

京極祖

師輔

後拾遺十二恋一

為光
号法性寺太政大臣法住寺
又号京極
諡曰恒徳公

道信

從四上
左少将

齊信

權大 正二 別当

女のもとより雪ふり侍ける日、かへりてつかはしける

帰るさの道やハかへるかはらねとくるにまとふ今朝の淡雪

52 あけぬれハくるゝ物とハしりながら猶うらめしき朝ほらけかな」^{2才}

此哥モ後ノ朝ノ恋ノ心也、第二句ハ後ノタヘたのむ中トハよく分
別しなから、只今ノ別ノ切ニ悲しキニ、朝ほらけカナクハよからん
物ヲト也、尤あハれふかく面白キ歌ト也

五十三 ○右近大將道綱母 藤原倫寧女 本朝美人三人之内也云々 東三条入道摂政兼家室

中関白 儀同三司

道隆

道兼粟田関白

大納言右大將東宮伝

師輔 兼家

道綱

母陸奥守倫寧女

道長

御堂関白

冬嗣 長良 批把中納言

基経 昭宣公

弁 内蔵頭

藏 右兵衛督人

高経 正四下

頭

左馬頭

左馬助

右兵佐

惟岳 從五下

倫寧

母山城守恒基王女 本朝美人三人内也

女子

伝大納言道綱母

拾遺 十四 恋四

入道摂政まかりたりけるに、門を遅くあけけれハ、立わつらひぬ
といひ入て侍けれハ 右大將道綱母」^{3才}

53 歎つゝひとりぬる夜のおくるまはいかにひさしき物とかハしる

心ハ詞書ニ明也、初句ノ歎つゝト云ヘル、甚深ナル詞也、能く可分

別事也、門ヲ明ぬる間さへ立わつらひ、待かねたる由うけ給ルニ、

わか歎きつゝ独ぬる夜の明る間ハ、かかに久しキ」^{4才} 田ハ田融・田満 頓ハ

頓極・頓足イ速歎 足字可然歎之由云々 物トカ思召スソト也、当座ノ頓即ノ作

意奇特也、天然ノ作者ノきはアラハル、事とそ」^{4才}

五十四 ○儀同三司母 從一位高階成忠女 中関白室 儀同三司伊周公ノ母也後拾遺三八高内

侍トアリ、

伊周公 系図見右大將道綱母 内大臣正二位 内覧 兵杖 長徳一四廿四有事、左遷太宰府

同三四五婦京、号帥内大臣

新古今

中関白かよひそめ侍けるころよめる

54 忘れしの行末までハかたけれハけふをかきりの命ともかな

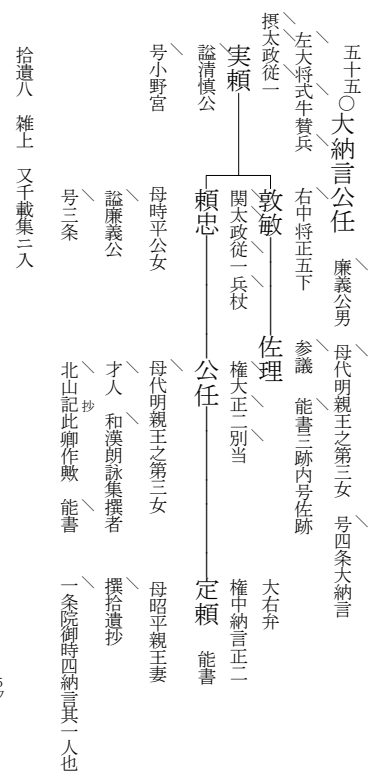
是モ心ハ明也、人の心ノたのみかたき事ハ、あすヲ期セヌ」^{4才} 【後拾恋

三赤染衛門あすならハわすらるゝ身になりぬへしけふをすくさぬ命ともかな】物也、一夜

ヲ思出ニシテ、人ノ心ノ恋セヌ先ニ消モウせなハヤト云ル心、切ニ哀ナル哥也、猶モ一夜ノきハ、人ノ心モカハラヌ時ニトイヘリ、能ト詞つかひヲみ侍るヘシ、くれくやさしき哥ノ風体也ト先達モ云ヘリ、為家卿ノ、

よしさらハちるまでハみし山桜花のさかりを面かけにして

是ヲトレリ



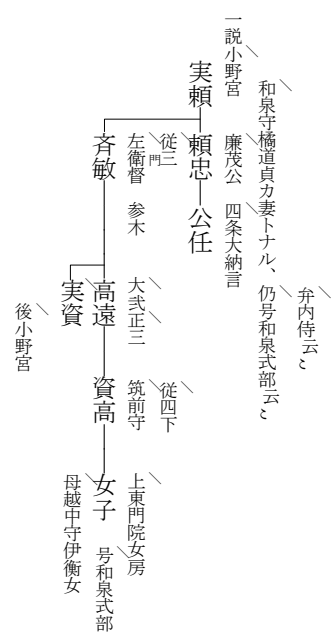
大覺寺にて人とあまたまかりたりけるに、ふるき滝をみて」よみ侍ける

右衛門督公任

55 滝の糸はたえて久しく成ぬれと名こそなかれて猶きこえけり

嵯峨ノ大覺寺也、此所ノ滝殿さしモいかめしうつくれる所ナレトモ、昔の跡ふりはて、物さひしきさまヲ、うちなかめテ思ひ入テよめる哥也、下句ニ名こそ流レテ猶聞エけれと云ヘルうちニ、人ハ只名のみとまる道ヲおもふ心もこもれるニや、オモテハいかにモさらトイひくたしテ、心ニ觀心ノ侍ル所ヲ、能く吟味スヘシトソ

五十六 ○和泉式部 上東門院女房 大江雅致女 母越中守保衡女 此人富子内親王乳母



性空上人のもとに、よみてつかはしける

雅致女式部 和泉式部 越前守 正四下大江雅輔女 致子如何

くらきよりくらき道にそ入ぬへきはるかにてらせ山のはの月

後拾遺 十三恋三

心ち例ならす侍りける比、人の許につかはしける

和泉式部

56 あらさらん此夜の外の思いてに今一たひの逢事もかな

限アラン道ニモ、おくれ先たゝしと思ふ人ノアル時ニ、もし我立なはトみたり心ちノあらん折、其思ひノ切ナル心ヲ、能思ヒヤリテ見ルヘシ、尤さ有ぬへきニや、哀ふかき歌トナリ、殊ニ一二句たくひなくこそト云、初五文字ニノ心アリ、我身」此世ニあらさらんノ心モアリヌ、あるましき事なれ共ノ心モアリ、黄泉ノ道ノ思ヒ出ニシタキト云フ心モアリ

五十七 ○紫式部 上東門院女房 次鷹司殿女房 源氏物語作者

正六上 改姓從四上 正四下

御堂関白北方

冬嗣 良門 内舎人 左中将贈正二位 中納言從一 藏 越前守 兼輔 為時 女子 高藤 利基 弁 母摂津守為信女

57 是やくよりわらハ友たちに侍ける人の、年此をへて「行あひたる、ほのかにて七月十日ころ、月にきほひて歸りければ

心ハ詞書ニ明也、但幼少よりしたしき友ニ行あひて、心シツカニモナク、ヤカテ立歸リシ名残、サナカラ雲間ノ月ノ如ク也トテ読メリ、友たちヲ月にたとへイヘル詞ツカヒ凡慮ノ及フ所ニアラスト云ヘリ、友たちヲ月ニよそへテ、かやうニ寄合すへきとも、思ハサリツルト也、サリナカラヤカテ立カヘレハ、雲かくれにしトヨメル也、月にき^{8オ}おふハアラソウヤウナル心ナルヘシ、雲かくれの詞、如此ハ不可苦歟、いさゝか憚ヘキ心アリ、今ハ斟酌アルヘキ事可然カ云ヘリ

五十八 ○大式三位 後冷泉^云、後一条院御乳母 左衛門佐宣孝女 母

紫式部

大式成平力妻タリ、仍号「大式三位」^云、

左中将從四下

内大臣、三条右大 左大弁 權中正三 左門佐正五下 賢子

高藤 定方 朝頼 為輔 宣孝 女子 狭衣作者

祖甘露寺又松崎

後拾遺十二恋一

58 かれくなる男の、おほつかなしなといひたるによめる
ありま山あなのさゝ原風ふけハいてそよ人をわすれやハする

人丸しなかつりみな野をゆけハ有間山夕霧立ぬ宿ハなくして

此哥ヲ思ヘリ、此さゝ原ノ哥序哥也、おなし序歌ナレ共、上ノ心にて其哥ノ用ニタツモアリ、此哥ハいてそよト云ハンタメハカリノ序也、是ハ上ノ道具ハカリ用ニ立タル詞也、昔ノ哥ノ長有テ聞ユルハ、皆序哥ノ故也、其境ニ入ラスシテハ、か「やうノ心わきまヘカタキ事トソ、いてそよハいてやト云心也、心をこしテ驚カス心也、いてト句ヲ切テ人ト見タルカヨキ也、何カ人ヲ忘ル、事ノアランスルソト云心也、風フケハ篠ハそよく物也、そよ共なる物也、つらき人ヲ恨ルハ、あなノ篠原ノ如ク也、風力ナクテハ、篠モ音セヌ物也、我恨ハ其方ニアルト也

古恋一 いて我を人なとかめそ大船のゆたのたゆたに物思ふ比そ同四 いて人ハことのみそよき月草のうつし心ハ色^{9ウ}ことにして

五十九 ○赤染衛門 赤染時^男用女^云、上東門院女房 或應司殿 或大隅

守赤染時^男用女^云、右衛門志尉等ヲ経タリ、其女タルニ依テ赤染衛門ト云、栄花物語作者 大江匡衡妻

一説

光孝天皇 是忠親王 興雅王 平篤行 兼盛

赤染衛門 妹中関白密通人哥ノ詞二見タリ

後拾遺十二恋一

中関白少將に侍りける時、はらからなる人に物いひわたりしけり、たのめてこさりけるつとめて、女にかハりて 赤染衛門

59 やすらハてねなまし物をさ夜更てかたふくまでの月をみしかな
やすらハてトハ猶豫スル心也、猶豫ハ猷也、多疑慮、毎聞人声、輒登木久之、無人然後下、須臾又上、如此非一、故不決曰猶豫【句会小

異アリ、字彙ノ注也、又瀧西謂大為猶、人行每豫在前、待人不至、又来迎候、故謂疑為猶豫」
ヤカテモ寝スシテ、若ヤト待ヤスラヒテ、傾クマテ月ヲ見シ事ヲ後
悔スル義也、よもくト思フテ待程ニ、月ノ傾フキタル也、傾フク
マテ月ヲ見シ所此哥ノ詮也

六十〇 小式部内侍 上東門院女房 和泉陸奥守橘道貞女 母和泉式部
初通堀川右府頼宗公

橘諸兄公七世孫—仲遠—道貞—小式部内侍^{10ウ}
和泉陸奥守 後通大 二条關白之教通公

金九雜上

和泉式部保昌にくして丹後国に侍るける比、都に哥合の有けるに、
小式部内侍哥よみ侍けるを、中納言定頼^{10ウ}つほねのかたにまうてきて、
哥ハいかゝせさせ給ふ、丹後へ人^ハはつかはしけんやつかひハまうて
こすや、心も^{いかに}となくおほすらんとはふれてたちけるを、ひき
とゝめてよめる 小式部内侍

60 大江山いく野の道の遠けれハまたふみもみす天の橋立

此哥ハ小式部力哥ノよきハ、母ノ和泉式部ニよませテ、わか哥ニス
ルト云事ノ侍けるヲ、口惜ク思ヒケル比、定頼卿ノかく^{11オ}「イヘルニ
読ル哥也、中納言モ母ノ哥ヲ小式部力哥ニスルト云世間ノ事ヲ思ヒ
テイヘルニヤ、此時此哥ヲよますハ、かねテノ疑ハ晴マシキヲ、此
秀哥ヲ読ルニ依テ、世間ノ疑ヲモはらし、わか名誉ヲモしたるハ、
有カタキ事ニヤ、たとひ又当座ニ読リ共、猶ざりことハかひナカル
ヘキニ、既名哥ナレハ、其徳たくひなく侍ル物歟、哥の心ハ無別義
也、大江山いく野橋立」大江山丹波国、生野同、天橋立丹後」ヘノ道也、また
ふみもみすハ、文ト又行テモ見ヌトニカ、レリ、文モ見ヌハ、定頼

卿イヘル、使ハまたまうてこすやニよれり、当意即妙ノ哥也、和泉
式部^{11ウ}橘道貞ニ忘られて後、藤原保昌丹後守ニナリテ下向ノ時具シ
テ下レル也

六十二〇 伊勢大輔 上東門院中宮ノ時候スト云、祭主從二位輔親女ナル故にて、
伊勢大輔ト号云、系図大中臣能草下ニ見タリ

詞一春

一条院の御時、奈良の八重桜を人のたてまつり侍けるを、お^{12オ}まへ
に侍りけれハ、その花を給りて哥よめと仰られけれハよめる

伊勢大輔

61 いにしへのならの都の八重桜けふ九重にほひぬるかな

心ハ故郷ノ桜の又都ノ春ニモ逢カタキカ、今日君ノ御覽ジテ、二度
時ニアヘル心たくひなき也、しかも八重桜トをきて、今日九重トイ
ヘル、当座ノことわざニ奇特ノ粉骨也、カヤウノ事ハ、天性ノ達者
ト平生ノたしなみトシテいたす所也、道ニたつさハらん輩ハ、是ヲ
可思哉云、

或抄聞書奈良ハ旧跡ニテフリハテタル所ナレトモ、今日ハ^{12ウ}奈良ヘ
参リタルニ依テ、桜の匂フト也、花ノ上ノミニテモ無シ、人ノウヘ
モ如此ト也

六十二〇 清少納言 定子中関白道隆公女

イニ女云

一条院皇后宮女房 清原元輔女 深養父彦云、
枕草子カケル人 老ノ後ニハ四国ノ辺ニおちふれてありト云

後拾十六雜二

大納言行成物かたりなし侍けるに、うちの物いみに^{13オ}「こもれハと

ていそきかへりて、つとめてとりのこゑにもよをされてといひおこ
せて侍けれハ、よふかゝりける鳥のこゑハ函谷関の事にやといひつ
かハしたりけるを、たちかへりこれハあふさかの関に侍とあれば、
よみ侍ける

清少納言

62 夜をこめて鳥のそらねはハかるともよに相坂の関ハゆるさし

御物忌ニハ夜更又先ニ参ル物也、夜前ノ残多カリシ事ヲ、云ヒヲコ
セタル也、鳥ノそらね函谷関ノ故事、孟嘗君カ故事也、はかるトハ
たばかる心也、相坂の関ハゆるさしトハ逢事¹³をゆるさしノ義也、
惣ノ心ハ明ラカ也、彼孟嘗君夜半至函谷関、とノ法鶏鳴出客、とニ
有善鶏鳴者、鶏ノ鳴まねヲシケレハ、誠ノ庭鳥モ鳴ケリ、仍夜ふか
きニ関ヲ明テ通シ¹⁴けり、是ヲ鳥ノそらねハはかるともト云ヘリ、第
二・三句ニテ函谷関ヲ出テ、相坂ノ関トヲヤス、ト一首ニよみ出
セル事、上手ノシワサ也、哥ノ心ハよし、其函谷ノ関ヲハ鶏鳴¹⁵たはか
リテ通ル共、あふ坂ノ関ヲハゆるすましキト也、よにあふさかノ上
にハ、詞ノ字ト云、

をのれなけいそく関路のさ夜千鳥とりのそらねも声たてぬまに
定家¹⁴

続拾秋上

あふ坂や鳥の空ねに関の戸もあけぬとみえてすめる月影為家卿

玉春上

夜をこめて霞待とる山のはによこ雲しらてあくる空かな西園寺入道
相国

六十三 〇右京大夫道雅 帥内大臣伊周公男 母大納言重光女
頭從三位右京大夫 東イ

号荒三位

上西門院女房

伊周公道雅

女子 号大和宣旨

天喜 七十出家同廿日薨

後拾作者

六十一

左中弁義忠朝臣室

後拾十三恋三

伊勢の斎宮わたりよりのほりて侍ける人に、しのひてかよひけるこ
とを、おほやけもきこしめして、まもりめなとつけさせ給て、しの
ひにもかよはすなりにけれハ、よみ侍ける 左京大夫道雅

あふさかハあつまちとこそきゝしかと心つくしの関にそ有ける
榊葉¹⁴のゆふしてかけるそのかみにをしかへしてもにたるころかな
63 いまハたゝ思ひたえなんとハかりを人つてならていふよしもかな
心ハ明也、おほやけヨリまもりめナトツキタレハ、又逢奉ル事ハ有
ヘカラス、人つてならてハ、ことヲモ不可通也、よし¹⁵今ハタ、
思ヒ絶ナント云事ヲタニ、人伝ナラテ申理リ度トノ義也、又或説ニ
三条院皇女前斎宮ニ密通露頭して、消息絶テノ哥ト云ヘリ、此義大
鏡ニ委シ

鏡ニ委シ

六十四 〇權中納言定頼 公任卿息 母昭平親王女 正二位

系図公任卿下ニアリ、父ニ孝アリシ人也云、

千載六冬

宇治にまかりて侍ける時よめる 中納言定頼

64 朝ほらけ宇治の川霧たえ¹⁵にあらはれわたるせ¹⁶の網代木
祇注眺望ノ哥也、此歌ハ人丸ノ哥ニ、

武士の八十宇治河の網代木にいさよふ波の行ゑしらすも
ト云ヘルヲ取テ説ル哥ト云、心ハ宇治ハ山深キワタリニテ、河上

ノ霧モ晴カタキ所也、朝ほらけノオカシキ折シモ、なかめヤリタルニ、ほのくトあらハレツ、又かくれツシテ、有ハナクなきハあらハレタル心也、眼前ノ眺望也、大方此哥ハ生死輪廻ノ心籠レリト云リ、猶師説ヲ受ヘシ、おもてハ網代ノ興也ト云、網代ハ魚ヲとる物也、近江ノ田上川ニテトれタル氷魚ヲ、宇治川ニテ取ルト云、先宇治ト云所^{16オ}景氣面白キニ、網代ノ興殊ニ一入也、田上川ヨリモ宇治ノ奥ハ勝レタル由イヘリ、たえくト云此哥ノ眼也、たえんとシテ不絶カ一也、霧ノ変化シタル心也

六十五

○相模 先祖不詳 相模守大江公實妻 仍号相模云、 本名^{16ウ}侍従 入道

一品宮女房

不知氏神之比見家集

又不詳

○前能登守慶滋保草女

公實朝臣為相模守之時為妻、仍号相模 本名^{16ウ}侍従

後拾十四恋四

後拾遺目錄如此

永承六年内裏哥合

相模

65

怨わひほさぬ袖たにある物を恋にくちなむ名こそおしけれ

抄祇同之名こそおしけれトハ、諸共ニあひ思フ恋路ナラハ、名ニたゝ

んモせてナルヘキヲ、頼ミカタキ人ナトヲ、はかなく契リ初テ、

うき名ノ朽ナン事ヲ思フアマリニ、ほさぬ袖たにある物をトヨメリ、

袖ハ朽ヤスキ物ナルニ、ソレサヘアルヲトイへる、あはれふかに

や、恨佐トハうらみわひぬる事也

私袖ハ朽ヤスキ物ナルニ、ソレサヘアルヲト云ヘル、○如何朽ヤス

キ袖^{17オ}サヘいまた不^{17サ}朽ニ、名ノ朽ナン事ヨト云歟、袖ハ朽ヤスキ

物ナレハ、尤ナルガ名サヘ朽ナン事ヨト云心歟、不知也

三或聞書也涙ニムセヒ袖ノ朽ハツルト云フ事常ノ事也、サレトモソレ

ハ人ノシラヌ事也、名ヲクタスハ、世ノ人ノ知ル事也、ほさぬ袖たにある物を、其上恋ニ朽^{コヒ}なん名こそ惜けれト也、

私後拾遺恋四二入、恨恋ノ哥歟、袖ハ朽ヤスキ物也、名ハ惣シテくち

ぬ物也、人シレヌ袖ノ朽ヌヘキ事サヘ悲^{カナ}シキニ、其上ニ朽ヌ物ナル

名ヲサヘ我ハクタサン事ヨト歎キタル心歟、世間ニ悪声ノアルヲ、

名ヲ流ス・名ヲクタスナト云フ也^{17ウ}

故前右府実公にくからぬ人ナラハ、ぬれきぬヲモ着^{キル}ヘキニ、我ハつれ

なき中ナレハ、いたつらにくちんよと分別シタル哥也、私此にくか

らぬ人ナラハト云ヘル、無分別ノ事也

同前

つれなからぬ人ナラハ、名ニカヘテモアハンスルカ、是はいたつら

二名の朽ヌヘキ事ナレハナリ、不逢シテ名ノ朽ナン事ヲ、深く歎タ

ル也、私此義ハ聞ユルニヤ^{18オ}

六十六 ○大僧正行尊

三井寺 円満院祖 天台座主 法務

白川院御猶子 修驗名徳之人

長承三勅為衆僧上座 僧徒一座宣歟

寛仁元辞東宮

三木徒三 寺

三条例 小一条院

源基平 行尊

鳥羽護持僧 三条院皇子

号御子宰相

又住平等院 明行法親王弟子

敦元親王 出家 法名明衡 住三井寺

禁秘御抄三云鳥羽院御時行尊僧正夙夜祇候、定候御陪膳歟

金葉第九雜上

さくらのさきイ

さくらの花の又イ

おほみねにて思ひかけす花のさきたりけるをみてよめる

僧正行尊^{18ウ}

66 もろともにあはれと思へ山桜花より外にしる人もなし

抄大峯二行者ノ入事、順逆アリ、春入ハ順ノ峯臘月ヨリ歟、秋ハ逆ノ峯ト云ヘリ、是ハ順ノ事ノ時ナルヘシ、思ひかけぬ桜ト「思ひかけぬ桜大峯ニ思かけぬ桜のさきたると云」侍るハ、卯月ハカリノ事ト見ユ宗義性ト、哥見タリの心ハ花より外にしる人もなしトハ、只今我ヲハ花ヨリ外ニしる人モナシト云ヒテ、心ニ又花も我ヨリ外ニしる人あらしト云心こもれる也、されハもろともにあはれト思ヘトハいへる也、此行尊ハ小一条院御孫ニテ、ヤンコトナキ身ナカラ、万々修行セシ也、其内二大峯ニテノ事也、尺云性ニ好頭陀十七ニシテ潜出「園城」涉跋名山19オ「靈区」云

三心ハ太山木ノ名モシラヌ木共ノ中ニ、思かけす桜ヲ見付タル也、余ノ奥山ニハ松・杉ナトモナキ物也ト云ヘリ、定家卿哥、

たのむ哉その名もしらぬ三山木しる人えたり松と杉とを

トイヘリ、まして花ハ珍敷覺エテ、都へ帰リタル様ニ覺ユル心也、非情ノ草木ナレ共、花モ我ヲ哀ト思ヘト也、大峯ハ世間ヲハナレタル山中也」

六十七〇周防内侍 後冷泉院女房

左大将

大納言從一

中納言從三

中納言

伊世守從四上

桓武天皇 葛原親王 高棟 惟範 時望 真材

從四下 從四上 周防守

親信 重義 繼仲 周防内侍

仲子 伊女 又一本宗仲云、

千載雜上十六

二月ハかりに月あかき夜、二条院にて人ノあまためあかして、物語などし侍けるに、周防内侍よりふして、枕もかなとしのひやかにいふをきゝて、大納言忠家20オこれを枕にとて、かひなをみすのしたよりさしいれて侍けれハ、よみ侍ける

周防内侍

67 春の夜の夢はかりなる手枕にかひなくたゝん名こそおしけれといひ出して侍けれハ、返しによめる

大納言忠家

契りありて春の夜ふかき手枕をいかゝかひなき夢になすへき哥ノ心ハ明也、かひなくたゝんヲ、かひなヲたち入てみれハ、哥さまあしく成也、只春のよのみしかき間ノ夢ハカリニ、曲ナキ名ヲなかさんハかひなしト也、又夢ハカリハ夢程20ウナル歟、そとノ間ノ外ナルヘシ、いかにも懇ニやさしき姿也、時ニ臨ンテ当意即妙ノ哥也、惣別哥ヲ読ヘキ人ハ、行住座臥心にかくへき事也トソ、遍昭僧正ノ嵯峨野にて馬より落テ、われおちにきと人にかたるな、道綱卿母の、いかに久しき、小式部力またふみもみす、伊勢大輔かけふこゝのへにといひ、此哥なとよめる有カタキ事トソ

三哥ノ心ハ明也、かひなくたゝん面白也、よき縁語也、大江山・歎つゝなどの哥これらの頓作ノ秀逸奇特也、嗜ゆへ出来スル事也故前右府春ハことに短夜ナレハ、秋ノ夜ナリ共名にかへん事ハ如何ト也」21オ

引歌 秋のよの千よを一夜になすらへていふよしねハやあく時のあ

返し

秋のよの千世を一夜になせりともことハのこりて鳥や鳴なん

六十八〇三条院諱 居貞 冷泉第二御子 在位五年 母贈皇太后超子 東三条入道

攝政兼家女 天延四正三降誕 寛和二十六年宮中 寛弘八十三即位卅六才 長和五正廿

五讓位四十二才 寛仁元四廿九出家法諱金剛淨 同五月九日崩四十二才

六十五代

花山院

六十三代 六十七代

冷泉院 三条院

六十二代

村上天皇

後拾遺十五雑一

れいならすをハしまして、位などさらむとおほしめしける比、月の

あかゝりけるを御覽して 三条院御製

68 心にもあらてうき世になからへハ恋しかるへき夜半の月かな

抄祇注哥の心ハ明也と云、但此二ノ句猶心を付へシ、御違例故二

御位ヲさらんと思召スニ、若不意ニ御命もなからへ」させ給ハ、

此禁中ノ月いかはかり恋しくも覺しめし出されんとナルへシ、誠ニ

アハレフカハルへシ

三御違例カチナル故ニ、御存命モ有カタク思召也、されども若

意ニ御存命モ有ナラハ、雲此ノ月ハ恋シク思召シ出サルヘキト也」

六十九〇能因法師 俗名永愷 長門守云、肥前守元愷子云、

左大臣橘諸兄 奈良丸 嶋田丸 常主 安吉雄

良植 純行 忠望 元愷 能因 俗名永愷 号古曾部入道 古曾部ハ

此能因ハ殊二道二名譽有シ者也、天河苗代水ニ

白河ノ関ノ哥ノ事 長柄ノ橋柱ノ事 其外種々古抄物ニ記シタ

ル事多シ

後拾遺五 永承四年内裏哥合によめる 能因法師

69 嵐ふく三室の山のもみち葉ハ龍田の川の錦なりけり

抄此哥ハかくれタル所ナシ、只時節ノ景氣ト所ノさまヲ思ヒ合セテ見

侍ルヘキ也、ありくト誦出ス事、其身ノ粉骨也、是ハ誠ニ上古ノ

正風躰成ヘシ、カヤウノ哥ヲハ末代ノ人ヤスク思フヘシ、其マ、

ナル所真実ノ道ト可心得也、古今二人丸哥、

立田川紅葉ゝなかるゝ神南備の三室の山に時雨ふるらし

又、

神南備の三室の岸やくづるらんたつたの川の水のにこれる拾遺

物名高田利春

三三室ノ紅葉ヲ染くタルハ、此河ノ錦ヲしかん為ヨト也、いかに云ヒ

テモ嵐ト云物ナクハ、此川ノ錦ヲ見ル事不可有也、此嵐ハ錦ヲタメ

ヨト也、

古龍田川紅葉乱レテなかるめりわたらハ錦中や絶ナン

此哥ヲ取テ後柏原院、

春ことの花の錦の中たえて紅葉の秋にうつる色哉

面白キ御製也

故前右府嵐はけしくて、三室ノ紅葉ヲチラスヲ、心ニハおしむ物カ

ラ、立田川ニハ錦ヲサラスヨト云也、三室ノ嵐はけしくて、立田川

ノ錦ヲシクト云也と

七十〇良暹法師 父祖不詳 祇園別当天原二毛住云、母ハ実方朝臣ノ家 女房

白菊ト云者也云、

後拾遺四 秋上

題しらす 良暹法師

70 さひしさに宿を立出てなむれはいつくもおなし秋の夕くれ
いづくもおなしト云所心ある事也、我宿ノ堪カタキマテサビシキ時、
思ヒワヒテ、イツクニモユカハヤト立テウチナカムレハ、何クモ
又同シ物也、我心ノ外ノ事ハ、有マシキト也、世上ハ何カヨキ、何
カ悪キト云事ハナキモノト也、只一身ノなす事ト見ヘタリ、我心カ
ラノサヒシサト也²⁴、詞ニハいはすシテ、心ニ籠タル事ト見レハ、
猶感深ク余情限リナキ也、定家卿哥ニ、

秋よたゝななめすてゝそ出なまし此里のみの夕と思はゝ

此哥をとれり、心モ又同シ、本哥ノ心ハ猶感フカ、ルヘシ云

鳴 三三三詩榮辱昇沈影与身 右歌心アル名誉ノ哥ト也、莊子ニ梟力里ニ

(二行分室目)

故前右三界唯一身心外無別法ノ心也、下ノ句ニテ決シタル哥也²⁵

七十一 〇大納言経信

中納言 源連方弟 母源国盛女
才人・能書・哥仙・作文・郭曲・笛・枇杷・哥人 後拾以下
作者、応徳三奏此時経信卿七十一才歟 通俊卿四十才歟 永
長二閏正十二於宰府薨八十二才

寛平法皇^{宇多}

一品式部卿 雅信 一条左大臣 権帥民部卿 従四上右少将
敦実親王 重信 六条左大臣 中納言 正 権大 木工頭右京大夫号大夫人公
寛平第九御子或第七 母時平公女 道方 経信 俊頼 俊恵
号桂大納言 筆策 東大 歌林苑執行

金葉三 秋

師賢朝臣梅津の家に人ゝまかりて田家秋風といへる事をよめる

大納言経信

71 夕されハ門田の稲葉音つれてあしのまろやに秋風そふく

抄芦ノ丸屋トハ、さなから芦ハカリニテ造レルヲ云也、其門²⁵田ノ
稲葉ニ夕暮ノ秋風そよゝト音スルト聞モアヘス、ヤカテ蘆ノ丸屋
ニ吹タルさま也、夏ノ中ナトニ吹風ニハ似ズ、芦ノ丸屋ニ風ノ音ノ
替ルト也、夕されハ夕暮トいふも同事也、但シ少シ風情ヲもつ心ア
ルニヤ、此五文字五句ニよくわたりタル也、夕されヲ深ク云ハ、
夕ニアレハト云フ心也、春^{祇注}され・冬されナト云ニ同シ、夕されハ
ト云時ハ、必ハト云ヘシ、春されの・夕されのナト、ハいはす云、
又説ニ去^{ザル}カト云義也、然ハ春去ハト云ハ、夏ニテ有ヘキ歟、又夕さ
れハ夜分歟ト云説在之、一向此義不用物也云²⁶

此哥又ノ説ニハ、そよゝト稲葉ヲ渡ル秋風ノ、やかて蘆の丸屋ニ
吹ト心ウル勿論也、但其まゝあしのまろやに秋風そ吹ト心得たるモ
可然にや、稲葉ニ音スル風の程モナク、芦ノ丸屋ニ吹ナト云フハ、
ヤウカマシキ様也、私云慈鎮和尚聖廟法楽ノ百首ニ、

夕されの哀をたれかとハさらん柴のあみ戸の庭の松風

トアリ、御自筆ヲ拝見シタル也、然時ハ夕されのといはんこと也、
但ことニヨリヤウニシタカフヘキ也、何モ不審云²⁶

三丸屋トハ丸キ家ニ非ス、芦ハカリニテ作りタルちいさき²⁶家也、門

田にそよゝト吹クト思フウチニ、ハや芦の丸屋ニ吹入タル心也、
又師説^{稲葉}芦ノそよゝトスルヲ、人ノ音信タルカト思ヘハ、秋風ニテ
あるよト云心也

故前芦ノ丸屋二人ノヲトツル、ト思ヒタレハ、只秋風ノ音ツレハカリ
ニテアリタルト云也

源俊頼朝臣^{29ウ}

74永、うかりける人をはつせの山おろしよはけしかれとハいのらぬ物を

初瀬ニ恋ヲ祈ル事ハ、住吉ノ物語ニ見エタリ、石山ニ祈ル事ハ鬚黒大将也、貴船社或女男に捨られて稲荷ヘ七日起請シタルニ、

滝の水かへりてすまハいなり山七日のほりししと思ハむ

後にかへり逢タルト也、初瀬ハ山中ニテ、嵐はけしき所也、初瀬の山おろしハ、はけしきノ枕詞ニいひタル也、祈レトモ、人ノ心ハはけしけれハ、只ハケシカレト祈リ申タル様ナレハ、ソレヲはけしかれとハいのらぬ物ヲト云ヘリ、逢ヘキヤウニトコソ祈ルニ、結局人ノ心ノはけしキト也、^{30オ}此哥ハ定家卿列シテ褒美セラレタル也、^{30イ}心ふかく詞心にまかせて、まねふともいひつゝけかたく、誠に及ふましき姿也云、

三人の心のはけしくかけはなれたるを、たとへていはんナラハ、はつせノ山おろしノ様也、祈念シテ成就シタル例モアル故ニ、いのれハ結局人ノ心ハケシクミユルト也、^{30ウ}

七十五〇藤原基俊、右大臣藤原俊家男、母陸奥守源為弘女

堀川右大臣 正二位 左衛門佐從五上 俊成卿和哥師匠ニ系家和歌之祖也

【御堂関白二男】 大宮右大臣 基俊 和漢秀才 新和漢朗詠集著

頼宗 俊家 基俊 母下総守高階順業女 保延四——出家法名覺舜

母高朗公女 母伊周公女 大納言正一 侍從大納言 通神之人云、

宗通 成通 蹴鞠龍串之達者

基俊 光寛 興 覺遍得業 興雄少僧都

千十二雜上

僧都光寛維摩会の読師の請を申ける時、たひ／＼もれにけれハ、法

性寺入道前太政大臣に恨申けるを、しめちか^{31オ}ハらのと侍ける又のとしもれにけれハ、よみてつかハしける

75契りをきさせもか露を命にてあハれことしの秋もいぬめり

此哥ノ前二堀川院御時——藤原基俊、唐国にしつみし人も我ことく三代まであはぬ——此前二作者アレハ、契りをきしの哥ニハ無作者也

維摩会興福寺ニテ毎年十月十日ヨリ至十六日被行、彼会ノ講師ハ藤氏長者ノ宣也、是ニ依テ、法性寺ノ関白ヘ申サレタルヘシ、此講師ノ事、誰カ番／＼ト金札ニ書付テ有事トソ、関白氏長者タル人、秋ノ末ツ方ヨリ誰／＼ト被指事也云^{31ウ}

法性寺ノ殿下ノ御返事ニしめちか原のと有しハ、

彼集^猶 たゝたのめしめちか原のさしも草われ世中にあらんかきりは【^標標原下野国也^カ、祇歟抄猶たのめといへる心をとりにて、契りをきさせもか露を命にてト云ヘリ、下ノ句ハ今年モ又漏ヌル心ノ愁ヲ云ヘル也

宗祇注可然也、三此基俊ハ和漢ノ才人、本朝和哥ノ祖、新朗詠ノ撰者、公任卿ニモ不劣人也、御堂関白ノ彦、右大臣ノ息ナルカ、不運ノ人歟、時ニ不遇昇進セザル人也、堀川院百首述懷哥ニ、

唐国にしつみし人も我ことく三代まであハぬ歎をそせし

此させもか露ノ哥ノ前二入タリ、顔駟カ故事也、^{32オ}

六条家文書深山ナリト云ヘ共、貫之カ血脈ヲ受テ、俊成・定家、為家ト系図ツ、キタル事也

維摩会

此時ノ関白法性寺殿下也、基俊我子ヲ思フ心ノヤミニ迷フト也、契

りをきしハ、たのめ置し也、しめちか原のト侍ル一言也、十月十日
維摩会始マル事ナレハ、九月ニさゝれねハならぬ故かく云也云々、私
又十月ニテモ秋もいぬめりトハ、可云事歟

七十六 ○法性寺入道前関白太政大臣 忠通公 知足院関白一男

御堂関白 宇治関白

道長 頼通

法名曰観 従一位 摂政関白

京極関白 後一条関白

師実 師通 忠実 忠通 兼実 良経

母具平親王女 母右大臣師房女 母右大臣俊家女 母左大臣 又富家 顯房女

慈円 諡曰慈鎮和尚 母從二季行女

詞花十種下

崇徳 新院位におはしまし、時、海上眺望といふことをよませ給けるに
よめる

関白前太政大臣 此前二哥アリ作者 在也仍此哥ノ所ニ無也

76 わたの原こき出て見れハ久かたの雲井にまかふおきつしら波

抄心ハ明也、是ハ我舟ニ乗テイヘル也、大かた眺望ノ題ハ、常ニな
かめやりタルヤウニのみヨムヲ、是ハ舟ニテ読ル心猶ヲカシク也、
哥さまたけアリテ、余情無限、杜子美力詩、春水船如^ニ坐^三天上^二、又
古文真宝^關秋水共長天一色トモアリ、雲ぬにまかふ所相似タリ、惣
別眺望ナトノ哥ニ、かくれたタル所ハ有マシキ也、只風情ヲ思ヘシ
トソ、此哥船ト云字ナケレトモ、至極舟ノ心あれハ、尤作者ノ手ガ
ラナルヘシ、か様の所ヲよく思フヘシ

三 是ハ陸地ノ眺望ニ非ス、舟中ノ眺望也、武蔵野ナトハ海ノ
如クミル也
ヤウナルト云ヘリ、和田原ハ海ヲ云、わたつみハ海神也、原トハ野

ニ不^レ限也、渺^{ベウ}トシテ広キ心也、久堅只空ノ事也、しなてゐるをし
てる・しもとゆふかつらき山ト云モ、皆此類枕詞也、惣而枕詞ハ子
細ノ有モアリ、又久堅ト云テハ、空ニハ成ましき也、漕出テ見れハ
ト云所ニ精ノ入ル也、陸地ヨリコソ空モひとつナレ、漕出テ見ルナ
ラハ、浪モアラント思ニタレハ、猶ハテノナキト云心也

故前右わか舟ニ乗ルト人ノ舟ニ乗ト二義也、舟ヲ漕出タレハ、滄海
漫トシテ目アテノ山モ不見、イツコヲ トリトモナク、天トひと
つ二見ユルト也、^{34ウ}

七十七 ○崇徳院 諡顯仁 鳥羽第一皇子 御母待賢門院璋子 大納言公実母 白川院御猶
子

詞花七恋上

題しらす 新院御製

77 瀬をハやみ岩にせかるゝ滝河のわれても末にあハむとぞ思ふ

抄岩にせカル、水ハ、われてモ末にあふ物也、ツラキ人ニ別テ後ハ、
逢カタキヲ、わりなくテモ末ニアハント思フハ、はかなき事^{34ウ}ソト
打歎キ、思ヒカヘシヘル也、われてモトハわりナキト別トヲ兼タ
ル詞也、伊勢物語ニ二日トいふ夜われてあハんと云フモ、わりナキ
心也、また金葉ニ、

三 三月のおほろけならぬ恋しさにわれてそ出る雲のうへより
詞書二内をわりなくいてテアリ、

【祇伊語ヲ引、伊語ノ心ハ始テ也、仍其心ニ見レハ違云、私祇注心わりナキ心ハカリニ云ヘル歟】
又抄ははいかにも深切ナル心也、伊勢——^{義少違一タトヒ}
別レ申タリトモ、又あひんとわりなく思フ心ニ見ル也、岩ニせかれ
テモ又あハんと也

故前右人ニせかれてありとも、つみニあはんと也、此われても一二分レテモアハント也、金葉ノ三か月のわれてト云ハ、わりナクシテモト云也」

七十八〇源兼昌 俊輔二男云、皇后宮小進、從五下

正二 三乃守、イ撰津守

一条左大臣 大納言 三木 右少将 美乃守

宇多天皇 敦実親王 雅信 時中 朝任 師良 俊輔 兼昌

イ仲 四位

金葉四冬

関路千鳥といへることをよめる

源兼昌

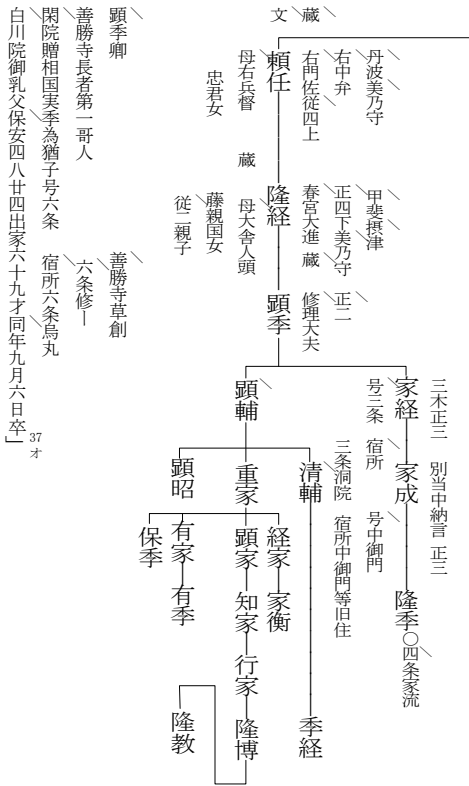
78 淡路嶋かよふ千鳥の鳴声にいく夜ねさめぬすまの関守

抄心ハすまノ浦に旅ねをして、彼嶋より千鳥のうちわひてかよひくるおりから、所ハすまの浦なれハ、一入旅ねのかなしさのたへかたき心より、関守ノよるの寢覚めヲあはれふ心也、源氏物語ニハ海人の家たにまれになんとかけり、わか一夜ノ旅寝さへあるに、関守ノ心ハさこそト也、此ねハをはんぬにてもなし、又不ノぬにてもなし、ねさめぬらんトらの字ヲそへてみるへしト也、尤哀ふかき哥なるへし、此兼昌堀川院ノ後の百首の作者也、されとも此百首ニ入ヘキ人トハ、難測事也、黄門ノ心ヲよく仰クヘキ者也、又抄はハすまノ浦一前ニいたくハらす、仍略也一入旅ねノ悲しき躰也、只関もりの心ヲ思ヒヤリテ、能と吟味スヘキ者也、いづれの哥ヲモ浅とト吟してハ、せんモ有ヘカラスト云、押紙千鳥ハ水辺ノ物ナカラ、陸ニ有物也、友ニさそハる心ヲヨメ

リ、関路千鳥ハ旅也、源氏須磨ノ巻ニ、あまの家たにまれになんトアリ、海士ノ家たにあるかなきかノさひしき所に、一夜もあかさハ悲しき事ヨト也、さてそれよりして、関守ヲ思出して、此千鳥ノ鳴声ニ、いく夜か関守ハね覺をして有ラント云ヘリ

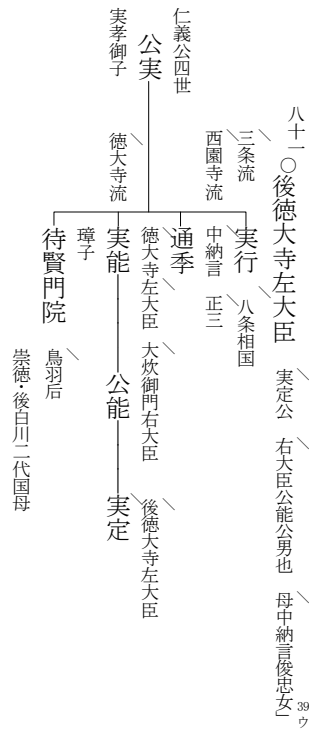
右前源氏物語ニモ、あまのたにまれにト云ヘリ、されハかゝる所ニハ、一夜ヲタニ明シカネタル也、此すまの関守ハ、いく夜もかし」かねんと也、又第四句濁也

七十九〇左京大夫頭輔 頭季卿二男 号六条家 和歌一流
淡海公贈太政大臣 川辺左大臣末茂 從五上 美作守 從五下 少納言備前守出羽但馬守 大式從四上 上野守 直從五上 弁 勘解長官 山城大和守 紀伊守 宗通 真道 連茂 佐忠 時朝 贈太政大臣 通 使 藏 藏 外祖父 光孝天皇



ノツ、キ奇特ナル哥也

三、哥ノ心ハ後朝恋ノ心也、黒髪カキヤラシ面影ヲ、其マ、忘レヌ也、長からん黒髪ノ事ニ読ニハアラス、自然ノ縁語也、人ノ心ノ行末とけんモ不知ス、長久ニモ有マシキニ、心ヲ見エツル事ヲ^{（海シキト也）}只乱ル、ト也、女ノ身ニシテハ、又心アル哥也、可付心トソ故前契りをく人ノ心ノ末遂^{トケ}ンモ不知、はかなき契リト思フニ、只乱ル、ト也



千載三夏

暁聞郭公といへる心をよみ侍ける

右大臣右のおほいまうちきみ

81 郭公鳴つる方をなかむれハたゝ有明の月ぞ残れる^{40オ}

抄抄同心ハ暁郭公ノ一声鳴ヲ、ヤレ夢カト思フ程ナルニ、行衛モナキ空ヲ打ナカムレハ、有明ノ月ノほのかニ見ユルサマ、誠ニおも影身ニしむヤウ也、時鳥ノ哥ハ、種々ニ心ヲ尽シテ、昔ヨリよめるタクヒあまたアレ共、コレハ只巨細ニハ云スシテ、然モ心ヲ尽シタル趣、限リモナキ風情ナリ、郭公ノ哥ノ第一トモ可書歟ト也、杜子美カ詩夢、李白詩ニ落月満屋梁、猶疑見顔色、琵琶引ニモ唯見江心秋

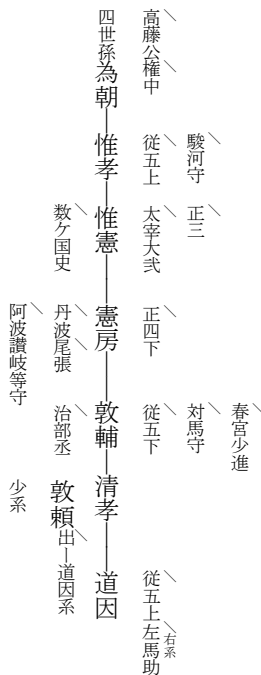
月白^{（事ヲ）}
スサシキ事ヲ

三此比郭公ノナカン、ト待タル故、先心カラシテ聞タル也、一声ニ付テ^{40ウ}おき出テ見レハ、有明ノ月ノミ残ルト也

故前公や、ト待ニ、一声鳴ハ夢カウツ、カタトリタル哥也、月ニ今一声なかせたらハ不可然、月ニユヅリタルカ勝レタル也、榮雅哥私此哥ヲトリテト云ヘリ云誤リ歟、

一声ハ夢にまかへて郭公とをさかる音をさたかにそきく^{（を）}

八十二 道因法師 俗名敦頼 敦輔孫 清隆男云々



千載十三恋三

題しらす 道因法師

82 思ひわひさても命ハある物をうきにたへぬハ涙なりけり

抄此五文字ノ思ひわひトハ、思ヒノ極リ、テ云ヘル也、さり共ト思フ人ハ、ツレナク成ハテ、キハマリ行思ひノ心也、カクテハ命モ消ウセヌヘキヲ、サテモ猶命ハ有物ヲ、憂事ニ不堪、忍物ハ涙ナリケリト也、堪忍セヌトハ思ヘトモ、ソ、ロニこほるゝ事也、我心ヲことほりテ、歎タル哥也、此哥ヲ浅クハ見ルヘカラス、恋ニトリテハ折角ノ心ナルヘシ、一首ノ内ニコトハリ^{41ウ}タル妙也、さてもト云所ヲ心ニかくヘシ

トリタル也

41オ

三消ヤスキ命サへかゝるニ、さてモ涙ハモロキ物哉ト也

思ヒアマリくテノ五文字也、一首ノ中ニ喩ヲ^{下レリ}読事アリ、此等也、是ハ一段懇切ノ恋ノ哥也、深切ニ忍ノ^手恋也、忍フ事ヲ深ク思ハ、涙ハ洩マシキ事ト也、惣別命ト云物ハもろき物也、人ノつらきニ不絶命サヘナルニ、涙ヒトツツ、マンハ安キ事ナルニト也故前 一首ノ内ニ喩ヘヲとレリ 逍遙院詠

わか身より外の物なる涙かハ心をしらハなとこほるらん^{12オ}

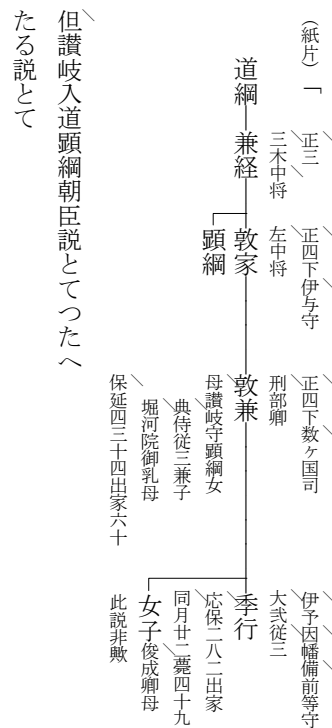
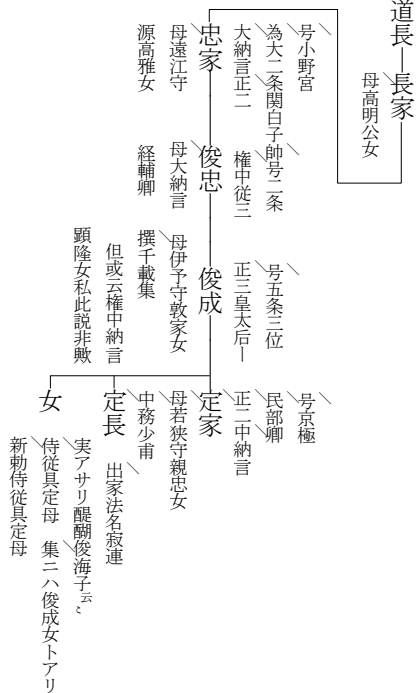
八十三〇皇太后宮大夫俊成権中納言俊忠男 母伊豆守敦家女 仁安十二廿四改名五十

四 頼正殿 頭輔卿為子時 頭広後改俊成 安元一九廿八依病出家^家

三 元久元十一 卅薨九十一才 建仁三十一 於和哥所給九十

賀イ 為頭頼卿子名字頭広後復私葉室祖頭隆卿男也^{本流}

御堂六男 号御子左 大納言正一 又二条 道長 長家 母高明公女



伊予三位 堀川院御乳母

亡父之祖母

さくさめのとしノ事也

伊予三位者敦家朝臣、弟頭綱朝臣女也、公卿補任伊予守敦家女云、

私頭綱朝臣女為敦家朝臣猶子歟

私頭隆司卿女ハ右大臣公能公ノ室并中納言頭長卿室等之母云、

(紙片) 一 宗政卿兼權僧正道勝此字也

三木左中将宗政室中納言雅教僧正道証等母

頭隆 女子

後為中納言俊忠卿室生右大臣公能室兼中納言頭長室等

俊成 母左中将敦家女 但或云權中納言頭隆女

此疑非歟

千載十七 雜中

述懷百首哥よみ侍ける時、鹿の哥としてよめる

皇太后宮大夫俊成^{12ウ}

83 世中よ道こそなけれ思ひいる山のおくにも鹿を鳴なる

抄心ハ色／＼ニ世ノウキ事ヲ思ヒトリテ、今ハト思ヒ入山奥ニ、鹿ノ物悲シケニ打鳴ヲ聞テ、山ノ奥ニモ世ノウキ事ハ有ケリト思ヒわヒテ、世中ヨのかれ行ヘキ道コソナケレト打歎ノ心也已下略

抄述懷ノ心面ニハ不聞、下心ニ含テヨメル妙也、世上ノ憂事ニウシ

【鳥ノ故事可勘記】ジテ、深山ヘ入テ見レハ、又山ノ奥ニモ、鹿ト云物ノ有テ、鳴ヲ聞ハ43オ悲シキ也、只ヨシ／＼世中ト云フ物ハ、遁ル、道ハナキ物也ト云也、塵中ニ居テモ山ニテモ、只人ハ心ト也

三俊成ハ皇太后宮大夫ニテハテタル人也、定家ハ中納言、孫ノ為家ハ大納言ニテ成シ也、二条御子左也、俊成述懷ノ百首、俊頼運ヲ恥ル百首等アリ、此哥ハ俊成卿自讃ノ哥ニテ、千載集ニ入度思ハレシカ共、世中よ道こそなけれト云所俗難アリテハト斟酌アリシヲ、勅定ニテ被入タル也

いかならんいはほの中にすまハかは世のうき事のきこえこさらん此哥ヲ思フヘシ、巖ノ中モ天地ノ外ナラネハ、同シ世中ヨト也、心カラシテ世ヲ捨テ、43ウ山ノ奥ヘ入テモ悲シケレハコソ、鹿ノ鳴ラメト也、イカニシテモ世ヲ捨シ道ノナキト也

故前古今いかならんいはほの―憂世ヲ遁レンニモ、世ヲ渡ルヘキ様モナキト也、万法一心ノ心アル哥ト也、心ヲ用力ヘヨト也44オ

八十四 ○藤原清輔朝臣 頼輔卿男 系図前ニアリ 太皇太后宮前大進正四下

新古今十八雜下

題不知ノ中ノ哥也

清輔朝臣

84 なからへハ又此比やしのハれむうしとみし世そ今ハ恋しき

抄心ハ明也、次第／＼ニ昔ヲ忍フ程ニ、今のうきト思フ時代ヲモ、

又先ヨリ後ニハ、忍ハンスルカトノ心也、万人ノ心ニ觀セシ哥ソト

也、只世中ノ人ハ頼ムマシキ行末ヲ憑ム物也、此哥ハ人ノ教誡ノたよりなるへし、哥ニハ理ヲつめすシテ、心ニモタセテ云ヘル常ノ事也、又理ヲセメテ面白モ、一躰ノ事ナルヘシ、上句ヲ下句44ウニテ答

ヘタル也、いひつめタル哥ナレトモ、余情アル也抄大略 同之

三誠ニ世上ハ平性コレソト手ニ取程ノ事ハナケレトモ、如何様ト頼ムマシキ行末ヲ人毎ニタノム物也、身ノツモリヲシタル也、又下句ヲ以テ証拠ニシタル也、此様ニ打クタキテ、有ノマヽニ読一ツノ句法也、恋ノ哥ナトニ多シ、建保年中ノ哥ノヤウニハ、又今ハ読マシキ也、正味ノ哥ハ、恋・哀傷・旅・離別ナトニアル物也、四季トハ又少カハル物也、此清輔宇治にて河水久澄ト云題にて、皆人と哥說出シテ、一人ヲソクテ迷惑セシニ、

年経たる宇治の橋守ことゝハむ幾世に成ぬ水のみな上45オ

ト云秀哥ヲ読タリ、名譽ノ事也

故前分際／＼ニ一度ハ時ヲ得ル事ヲ憑ム物ナレカ、是ハ是ハ行末マテモ憑ミナキ心ヲヨメリ

八十五 ○俊恵法師 經信卿孫 俊頼朝臣子 系図前ニアリ

千載十二恋一

恋の哥とてよめる 寂連法師哥此詞書也、寂連哥ノ次ノ哥也

俊恵法師45ウ

85 終夜物思ふ比はあけやらぬ闇のひまさへつれなかりけり

抄大略抄ノ義也、心ハ物思フ比ノ明カタキさま也、人コソアラメ、闇ノ隙サヘ明カタクツレナキハ、イカニシタル事ソト也、人ハツレナキ程ニ、待身ニモアラス、サラハ打とけテ寝ラレモセス、仍闇ノ

ヒマモツレナキ也、すまノ巻ニモ、つらからぬ物なくなんと云リ、

比ト云字ニテ、幾夜モくト云心カシラレタリ、又さへノ字感アリ、

祇注云心ハ明也、闇ノ隙さへつれなかりけりト云ヘル、心詞珍ラシ

ク、思ヒノ切ナル所モ見エ侍ルニや、うらやむましき物ヲ恨ミ、な

つかしカルマシキ物ヲ其面影ニスル事、^{46オ}恋路ノナラヒ也、能ク闇

ノ隙サヘト打歎キタル所ヲ思フヘキ也

抄^{同事ナレトモ}此心ハ只我心カラ物ヲハ思フ物也、闇ノ隙サへつれなかり

けりトイヘル、心詞メツラシク、思ヒノ切ナル所モ見エ侍ル也、う

らむマシキ物ヲ恨ミ、なつかしカルマシキ物ヲ其面影ニスル事、恋

路ノ習ヒ也、源氏物語すまノ巻ニ、つらからぬー是モ心カラナレ

ハ、人恨ミニテモナキ事也、人よけれハ鳥モよしト云テ、見タウモ

ナキ鳥ナレトモ、よき人ノ家ノ上ニ居レハ、よくミユルト也、所詮

只何事モ、我心カラト也、返く闇ノひまさへト云ヘル詞、奇特神

妙ノ詞也^{46ウ}云

三終夜ト此ノ字此哥ノ眼也、よもすからハ宵ヨリ曉迄ノ事也、此ハ幾

夜モく徒ニアカス躰也、人ノ心ノツレナキハ、是非モナキガ、闇

ノ隙サヘツレナク明ヌヨト也、さへノ字肝要也、

故前終夜ト云フヨリ、ツレナカリケリト云フマテ、一字モアタラヌ哥

也、スマノ巻ニ、つらからぬ物なくなんと云ヘル同心也、此ノ字幾

夜モくノ心也、さへノ両字ニテ、人ノ事ヲシレト理ハリタル也^{47オ}

八十六 ○西行法師 俗名義清 藤原清子 母監物源清経女 依道心俄発心出家所ニ經

行 法名田位大宝坊 又号西行 異本典沢 河内守 武藏守從四下 左衛門尉 内舍人 左門尉 左藤

伊予守 下野権守少掾 下野大掾 鎮守 使從五下鎮一將 鎮一 從五下 後藤 龜名公藤成 豐沢 村雄 秀郷 千常 文脩 文行 遠藤

五男 從四上 從五上 或知常伊智 等祖 武藏

從五下 佐藤 從五下 相模守 使 左衛門尉 使 左衛門尉 使 左衛門尉

使 公光 公清 李清 康清 義清 法名田位 改西行 鳥羽院下北面

實父公行 公光カ兄也 秀郷將軍之事 不見將軍補任云

千載十五恋五 此哥ノ前ニテ田位法師物思へとからぬ人も、

月前恋といへる心をよめる 此哥アリ仍此所無作者

86 なけゝとて月やハ物を思ハするかこちかほなるわかなみたかな^{47ウ}

抄又抄大略同也、終夜月ニ向ヒテ打ナカムルニ、物悲シクテ、只月

ノ我心ヲイタマシムルヤウナルヲ、思ヒ返シテカクイヘリ、少平懷

ノ躰也、是西行カ風骨也、更ニツクロフ所モナク、其マ、イフ所上

手ノしわざ也、白樂天カ贈内詩、莫對月明思往事、揖右顔色滅君年、

月ヲ見テ慰メントスレハ、猶物思ハル、也、所詮月ハ我ニ物ヲ思ヘ

トハ不可思、是モ我心カラ月ヲ見レハ、結句物ノ思ハル、ト思ヒ知

リタル也 具平親王哥に

よにふれハ物思ふとしもなければとも月にいく度なめしつら

ん^{48オ}

八十七 ○寂蓮法師 俗名定長 中務少甫 俊成卿養子 実俊海男

明月記 建仁二年七月廿日午時許參上、左中弁云少輔入道逝去之者、天王寺

院主申内府云、未聞及歟、聞之即退出、已為輕服身也、浮生無常雖

不可驚、今聞之哀慟之思難禁、自幼少之昔久相馴、已及數十廻、況於和哥道者傍輩誰人乎、已以奇異之逸物也、今已帰泉、為道可恨於身可悲云、又定家卿哥二、

玉きハる世のことハリもたとられす思へハつらし住よしの神

新古今五秋下^{48ウ}

五十首哥たてまつりし時

寂連法師

87 村雨の露もまたひぬ榎の葉に霧たちのほる秋の夕暮

抄此哥或人榎ノ葉ニフル時雨ノ面白カリシニ、又露ノ置渡シテたくひナキヲ、又其興モ不終ニ、霧ノ立ノホリテ、種々ノ風情ヲ尽シタルさまソト云ヘリ、当流ノ心ハ、雨ニ露ハ無キ物也、皆木ノ滴也、殊榎杉ハしつくノ深キ物也、又露モまたひぬ程ニ、村雨ノソノカハ露モ有ヘシ、露ヲ読上ハそとソ、キタル村雨成ヘシ、必雨ノ降時ハ、霧ノ立のほる物也、晴ル^{49オ}時ハ降物也、下ヨリアカルカ陰気、上ヨリオル^{下ル}カ陽也、榎ハ一段深キ山ニ有物也、景気面白キ哥也、寂連カ五臟六府カハル程案シテコソ秀逸ハ出来レト云ヒシ人也

八十八 皇嘉門院別当 源俊隆女 別当ハ物ヲ司トル職也

皇嘉門院聖子法性寺関白女 母大納言宗通女 崇徳后 近衛准母

正五下

大納言正二 大藏卿正四下 太皇太后宮亮

具平親王 師房 師忠 師隆 俊隆 皇嘉門院別当^{49ウ}

千載十三恋二

攝政右大臣の時、家の歌合に旅宿逢恋といへる心をよめる

皇嘉門院別当

88 難波江のあしのかりねの一よゆへ身をつくしてや恋わたるへき

三 所ハ津ノ国難波渡也、心ハ思ヒモカケス草ノ枕ヲカハシテ名残ヲ思フ躰也、日数ヲ経テ、爰ニトマルヘキニモアラス、又サソヒ行ヘキニモアラサレハ、身ヲツクシテヤ恋ヒわたるへきト歎クさま也、みをつくし自然の縁也

抄心ハ難波わたりノ旅寝ハ、サラテモ哀フカハルヘキヲ、思ハスノ契リニ名残ノ悲シサヲ思ヒ侘テ、所ノ縁ニ芦ノカリねノ一夜故ト置テ、身をつくしてやトイヘルさま、とり／＼ニ思ヒよせて、優ナルヘシ、只所ノさま、人ノ名残ナトヲ能と思ヒ入テ見侍ヘシ、返、何事モ、仮初ノ事ヨリ起リテ、世上ハ深キ思ヒトナル物也、詮スル所、只一夜故ニ身ヲ可尽歟ト也^{50ウ}

八十九

式子内親王 後白川第三皇女 齋院 准后 母從三成子 出家法名承如法

大炊御門齋院下申 又号萱齋院 嘉応元七廿四戌寅天晴賀茂

齋 内親王式子廿一退出依御惱 定家卿筆ニアリ非明月記反

古戴

新古今一恋一

百首哥の中に忍恋を

式子内親王

89 玉の緒よ絶なはたへねながらへ忍ふる事のよハリもそする

抄哥ノ心ハ忍ひあまる思ヒヲ、をし返シ／＼月日ヲ経ルニ、カクテモナカラヘハ、必忍フル事ノよハリもてする思ヒ侘テ、玉ノ緒ヨ絶ナハ絶ねト云ヘリ、堪忍性ノアル時、命モ絶ヨト也、其故ハ忍ヒよハリテ、思ヒノアラハレハ、イカナル名ニカもれんナト、深ク忍フ心也、猶よハリもそするノ詞、おかしくや侍らん、大方ナラハ、

よハリもやせんと読へキヲ、もそするト治定シタル所眼ヲ付ヘシ、心ハなからへハ必名ニたゝん事ヲ落着シタル詞ナルヘシ

三玉の緒種^緒アリ、糸^緒ノ事ニモ用、又琴ノ事ニモ読事アリ、是ハ命也、玉のをハかりト云ハ少^少ノ事也、忍恋ノ題ノ哥也、未言出恋・洩始恋、

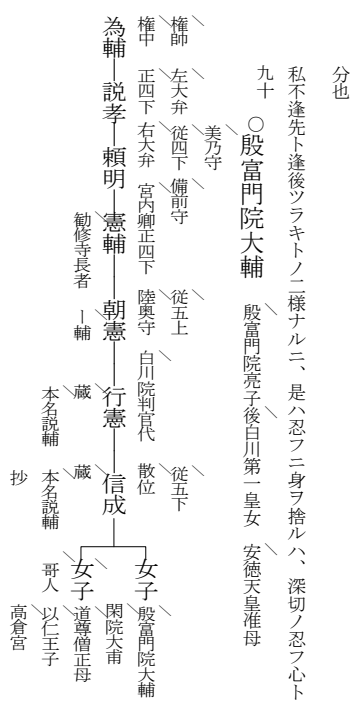
又逢テ忍事モアリ、年月ヲ経テモ忍フ物也、又むかひへ不被知シテ忍フ事モアリ、さま／＼ナル物也、^{私此義如何ス}題ノ表^{私此義如何}ハ本意ハ逢テカラノ事也、題ノ句^示ヒニヨリテ、末ニアルハ逢テ後也、此哥モ逢テ後ノ忍恋也、心ハ未^レ逢先ニハ、一度逢ナラハ其夜ニ命ヲ捨ル共ト思フ物也、

又契リ初テ後ニハ、人ノ心かはり時^ルハ、有テモかひナキト思カラ、命ヲ捨ント思フ物也、忍恋ニすてんと思フハ、深切ナル心也、人目ヲツ、ム事ノ退屈ナレハ、終ニハ人ノ知ラレ程ニ、其時ハ玉のをよ絶ヨト也、命ノナクハ人ノ名モ立マシ、我名モ祈マシキト也

故前命ノ絶ヨト思フハ、人ノツレナキ歟、ツラキ歟、二ツノ物也、此分也

私不逢先ト逢後ツラキトノ様ナルニ、是ハ忍フニ身ヲ捨ルハ、深切ノ忍フ心ト云歟^{52オ}

九十 ○殷富門院大輔 殷富門院亮子後白川第一皇女 安徳天皇准母



歌合しける時、恋の哥としてよめる 俊恵法師 思かね猶恋ちにそー

此哥ノ次ニ 殷富門院大輔

90 見せハやなをしまのあまの袖たにもぬれにそぬれし色ハかハラす

抄哥ノ心ハ海人ノ袖ハ和^メ布刈塩クミイツモヌレテアレトモ、色ハカハラ^{52ウ}ヌカ、我袖ハ紅涙ニ色モ変^カタル程ニ、如此シト人ニ見セタ

キト也、人トハ、我思フ人也、又ぬれにそぬれしトイヘル詞、珍ラシキ物也、ツヨクぬれタルトノ義也、四ノ句ニテ切哥也、又^{53オ}だにト云詞ニテ、恋ノ哥ニナル事多シ、涙ノ色ノカハル事ハ、舜ノ后娥

皇女英ノ班竹ノ故事ヨリ起レリ、又血涙ノ事長恨歌ニモ^{54ウ}回首血涙相和流トアリ、又大和物語・伊勢物語ニモアリ

祇注云雄嶋ノ海士ノ衣ハぬれ止ヌ物ナレハ、ソレヲ見ヨト思フ人ニいはまほしケレトモ、ソレモぬるゝハカリニテコソアレ、我袖ハ紅涙ナレハ、只我涙ノ色ヲ見せハやと云へり、をしまハ奥州^{53オ}松嶋郡也、

小嶋トハカリ云時ハ、嶋ヲ濁ル、松嶋や小嶋ト二ニわタル時ハ、嶋ヲ二ナカラ清テヨム也、

新^{54ウ}松かねをゝしまの磯のさよ枕いたくなぬれそ海人の袖かハ式子内親王

同秋のよの月やをしまの天原明方ちかきおきの釣舟家隆卿抄前ノ義ニ同略説也、三雄嶋奥州宮城郡ニアル名所也

是ハ勿論^{55ウ}也、家隆卿哥、秋のよの月やをしま、是モをしまヲ清也、くらふ。山・クラフ。山哥ニヨリテ清濁有ヘシ、小嶋ノ海人ノ袖ハぬ

れやマヌ物ナレハ、ヨキタトヘ也、サレトモ我袖ハ紅ニナルト也、娥皇女英ノ故事ヲ染タル事アリ、班竹ノ故事也^{53ウ}

蒙^{56ウ}求下和泣玉^{57ウ}韓非子曰楚人和氏得玉璞楚山中一、【和氏璧事】抱其璞而哭於楚山之下、三日三夜泣尽而繼^{58ウ}之ニ以^{59ウ}血ヲ一

千載十四 恋四

又海士ノ袖ノ浦ニ、ぬれぬハ有マシケレトモ、一入世ニゆるシテ、袖ノヌル、所ハ雄嶋ノ蟹ヲ云程ニ、吾袖ヲタクフル也、ぬれにそぬれにシトハ、ぬるゝカ上ニ猶ヌラシソヘタルト云心也、干間ナキト也、其海士ノ袖ハ色モカハラヌカ、我袖ハ紅ノ涙ナル故ニ、色ノ替ルト也、此袖ヲ見セタラハ、如何ナルツレナキ人モ、あハレトハ思ハンスル事ト也」^{54オ}

良縁公

九十一 ○後京極摂政前太政大臣

後法性寺入道関白兼実公男 号月輪殿
母從二位藤季行女

新古今五秋下

百首哥たてまつりし時

摂政太政大臣

91 蛭なくや霜夜のさむしるに衣かたしきひとりかもねむ

抄心ハ霜夜の狭筵ニ、衣片敷ねん敷ト也、蛭ノ鳴霜夜ノ折カララ侘タル也、天然ノ宝玉也、古語ニシテ、然モ新シキ物也、又毛詩ニ「蟋蟀入我床下トアリ、人丸ノ山鳥の尾のしたり尾のト云哥ニ劣ルマシキト也、祇注理ニをきてハ明也、」只蛭ト云ヨリ独かもねんと云ヘルマテ、悉金玉ノミ也、此五句卅一字ハ、何ノ詞モ珍敷詮トシタル事モナク、耳馴タル物ナレトモ、ツ、ケヤウノメテタキニヨリテ、詞ノ字ナラヌ、蛭狭筵マテ妙ニキコエ侍也、彼人丸ノ足引の山鳥のおノ哥ヲ取給ヘルニヤ云、宗長聞書足引の山とりのおノ哥ヲトリ給フ、情以新為せん、詞以旧不用トイフニ能叶ヘル也

三、次第ノニ夜寒ニ成タル物也、足引の山鳥のおノ哥ニ下ニ含テヨメリ、秋ハ先八月九月正長夜トテ、一入襟切ナル時分ニ、蛭モ始ハ野

ニ鳴、庭ニ鳴、戸ニ鳴ナトシテ次第第二狭筵ノ下ニ鳴寄也」サテ次第ニ霜夜ニ成タル物也、何トシテカ明サンスルソト成、狭筵ニ近ク啼ヨレトモ、人ハうとくテ、殊更独寝ナレハ、明シ難キ也、夜モ長ク蛭モ鳴故ニ、ネラレヌ物ノアツマリタルト也

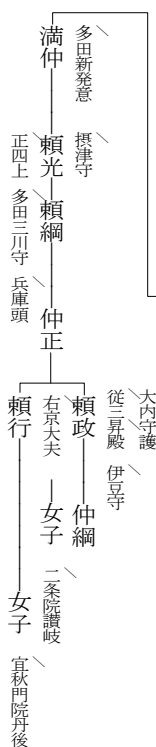
故前蛭ト云フヨリ結句迄金玉也、秋ニナリテ、ソバロ寒キ時分サヘナルニ、蛭ノ床近ク鳴秋ノ末ノ事ヲ思フヘシ」^{55ウ}

九十二 ○二条院讃岐

二条院ハ後白河第一宮 從三位源頼政女或ニ女

清和天皇 貞純親王 経基王

六条主



千載十二恋一

寄石恋といへるころをよみ侍ける

二条院讃岐

92 我袖はしほひにみえぬおきの石の人こそしらねかまくまもなし」^{56オ}

抄心ハ我袖ノよるひるトナク、かはく時モ知ス、思ヒフカキ我身ノ程ヲ、更ニ思フ人ニシラレヌ事ヲ、塩干ニ見エヌおきの石ト能たとへ出シタリ、奇妙也、しかも哥のさまつよくシテ、物ニウテヌ所アリ

新古今るめこそ入ぬる磯の草ならめ袖さへ浪の下にくちぬる

此名哥ヲをきて、是ヲ入ラレタルハ、能トノ事トソ、此作者ハ当時女房ノ中ニ定家卿執シ給ヘル哥よみ也トイヘリ、又大海ノ底ニ尾闾ト云石アリ、此石天下ノ火ノ海ヘ流レ入共、カハカス物也、仍大海

題不知

法印慈円卅三才歟

95 おほけなくうき世の民におほふかな我たつ杣にすみそめの袖

【拾玉 日吉社法樂百首之内詠也】

抄五文字我身ヲ卑下シテ云へリ、身ニ不相応様ノ心也、哥ノ心ハ法
徳モ至ラスシテ、天台座主ナトニ成テ、上一人ノ宝祚長久ヨリ下万
民ノ安穩快樂ならん事ヲ、二六時中心ニカケテ護持スルハ、身二応
セヌ事トナルヘシ、さてうき世ノ民におほふトハ、伝教大師ヨリノ
法衣ヲ一切衆生ニおほふモ、延喜聖代ノ寒夜ニ御衣ヲ脱給ヒテ、民
ヲアハレヒ^{59オ}給ヒシ心ヲ思ヒ給フナルヘシ、民ト云字ヲをくハ、延
喜ノ御心ヲとり給故也、心ハ只衆生ノ事ナルヘシ、我立杣ハ比叡山
也、彼伝教ノ御哥ヨリいひつけタルヘシ

阿耨多羅三藐三菩薩の仏たちわか立杣に冥加あらせたまへ

墨染ノ袖ヲ住ノ字の心に、あなかに見ルハわろし

抄此初ノ五文字ハ卑下也、天下ノ護持也、天下ノ人ニ法衣ヲおほふ
ヘキの心也、延喜聖代ノ寒夜ニ御衣ヲ脱給ヒテ、民ヲあはれひ給ヒ
シ心ヲ思ヒテ、一切衆生ノ上ニ御衣ヲおほはんスルト也、慈鎮ハ十
二時中此心ト也^{59ウ}

三吾立杣トハ天下トイハン為也^{私座主レハ猶心不ミテ杣ルヘキ也 座主前、}すみそめト

伝ニ住ノ心ハ自然也^{住ノ心自然ハモ 座主ノ時ナルヘキ也}、八雲御抄ニ秀句ハ哥ノ源ナレ共、む

ねトスル事キタナシト云へリ、抄ノ御詞也、一天下ノ法衣ハ皆衣ニ
ツ、マント也^{私如此ノニテハナシナシ可也 衆生者衣歟}

又伝教大師ノ阿耨多羅ノ哥ノ心ヲ以テ、一切衆生ニ此法衣ヲおほハ
ント也

故前我或力法徳モナクテ、護持ノ事ハおほけなき也、サレ共夜居ニ候
セラレテ、天下泰平・聖朝安全ノ御祈ハ云ニ及ハス、万民快樂ヲ随
分析ラル、ト也^{60オ}

九十六、○入道前太政大臣 公経公 内大臣実宗男 母入道中納言基宗女
大納言公季十太宮中納言大納言正二坊城内大臣 号一条太政大臣
通季 公通 実宗 公経 号西園寺 嘉禄年中建立西園寺

新勅撰十六雜一

落花を読侍ける 入道前太政大臣

96 花さそふ嵐の庭の雪ならてふり行物ハわか身なりけり

抄心ハ散ハてたる花の雪ハ、イタツラナル物也、はや時過テ人ノい
かにト見シ花ナレト、雪ト成はてテハ、あはれふ人モナクナレルヲ
見給ヒテ、我身モたのみ有ツル御世ナレトモ、ふり^{60ウ}ぬれハカヒナ
キ事ヲ、庭上ノ花ノ雪ヲをきて、ふり行物ハ我身なりけりト読給ヘ
ルニヤ、尤肝心深キ哥トソ、又ノ義只此心ハ花ノ盛ヲハ賞翫スル物
也、我ハさ様ニモナクテ、ふり行タル身也ト云心也、如此見レハ、
雪ならてト云詞よくたつ也

抄嵐ノ庭ノ雪ト云ニ心アルヘキ也、花ハ盛ニ賞翫スル物也、我身ハ
賞翫ハナクテ、只フリ行事ハ落花ト同前ト也、是ニテふり行物ト云
所聞エタル也、尤肝心深ク面白キ哥也、能と工夫スヘキ也云^{61オ}

三花ト云物サテモカヤウノ事モ有物歟ト思ヘハ、嵐ノマヽニ吹^{61オ}散シ
テ、雪ノ如クニナル也、枝ニコソ二度カヘラネ、又春ニナレハ咲也、
人ハ老テ若ク成事ナシ、羨敷ハ只花ソト云心也、年と歳と花相似、
歳と年と人不同ノ心也、面白哥也

故前花ハ雪トフレ共、又春来ラハ、二度咲^又ヘシ、我ハ少年ノ昔ノ春ニ

ハ二度ナ ルマシキ ト也 61ウ

九十七 權中納言定家

俊成卿男 母若狹守親忠女 美備院女房伯耆云々 初嫁
藤原為経 生隆信朝臣、後嫁俊成卿生定家卿 正一位民部卿 侍從 本名光孝 改季光 又改
定家

貞永元十一月十一日 四月十五 改元 出家人法名明静 号京極中納言入道 仁治二八月薨 新古今

撰者五人之一 又撰新勅撰 記号明月 家集拾遺感草

新勅撰十三恋三 詞書此作者ノ前ニアリ

建保六年内裏哥合恋哥 前内大臣 松嶋やわか身のかたにやくしほの煙の末を問人み

かな 前中納言定家

97 こぬ人をまつほの浦の夕なきにやくやもしほの身もこかれつ 62オ

抄此哥ハ万葉ノ長哥ニ、まつほの浦の朝なきに玉藻かりつゝ夕なきに藻塩焼つゝトアリ、来ぬ人をまつほの浦トハ、必一日ノ事ニハ侍ラサルヘシ、夕なきトをけるハ、波風モなき夕ナトハ塩焼煙モ立ソヘルヲ、我思ヒノもゆるさまノ切ナルニヨソヘテイヘル也、哥ノ心ハこぬ人ヲまつほの浦の夕なきニトイヒテ、やくやもしほのトツ、ケ、身もこかれてトヨソヘタルさま、凡俗ヲハナレタル詞つかひ也、もしほの文字ニそのやうニト云心ニをく所おほし、こゝモその様ニト也、夕なきト云ヘル妙也、煙ノ深キ心ヲトレリ、此哥心有ヘシ、祇注ニ黄門ノ心ニ 62ウ いくはくノ哥有ヘキニ、其中ニわきテ此百首ニ載ラル、事、思ヒハカルヘキ事ニ侍ラス、しきりニ眼ヲ付テ、其心ヲさくり知ヘキ事トソ、又ツ、トイヘルハ、一日ノ事ニアラス、連と思ヒノ切ナル事ヲ云也、在口伝

抄此哥詞ニ詞ヲ可レ付事ニアラサル事也、身ヲ焼ヨリモ悲シキハノ心也、万葉長哥ニモ、藻塩焼つゝト云ヲ、打カヘテやくやもしほト

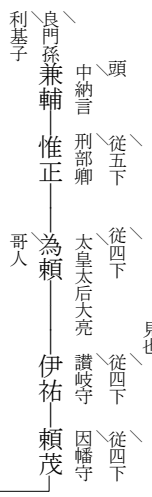
云ヘル也、定家卿ノ哥多キ中ニ、此哥ヲ被載タル上ハ、眼ヲ付テ可
見也

三松帆浦淡路也、まつほ穂ト可読ト云説アリ、乍去只まつをト読テ 63オ

ヨシ、此哥随分ト思ヘルカ、此百首ノ中ニアリ、此浦藻塩焼トヨメル事、万葉ノ長哥ニ、朝なきに玉藻刈つゝ夕なきにもしほやきつゝトイヘリ、松帆浦待心ヲ含メリ、心ハ待付ル事モナキニ、又こぬ人
を待シ鉢也、雨風モアラハ、サハリモ理リナレトモ、夕なきニ
テいかにも悠々トシタルニ、待ツケヌ故、やくやもしほの身もコ
カル、ト云ヘリ、一説夕なきト云ルハ、舟ニテモク来ヘキ人ヲ、待
心アルト云ヘリ、以外ノ惡説也、思ヒノ切ナル心ヲ、やくやもしほ
ト云詩ニモ、我身如焼トイヘリ、つゝと留ル事、心ノ深クこもる故
也 63ウ

九十八 〇從二位家隆

前中納言 太宰権帥光隆 男 母太皇太后宮亮実兼女 系云母信通卿 女 私信通女 系三三木公隆室之由有所見 女十一人ノ外不
見也



新勅撰三 夏

寛喜元年女御入内屏風に 前関白吉野川

河辺六月祓也

正三位家隆 前関白哥ノ下 夏ノ巻軸哥也^{64オ}

98 風そよくならのを河のたくれハみそきそ夏のしるしなりける

抄此川ニみそきヲヨメル事、万葉よりの事なるへし

みそきするならの小川の河風に祈りそわたる下に絶しと

心ハならノ小川ヲ檐ノ葉ニ取ナシテ、河辺ノ夕暮ノ納涼ハ、更ニ只秋ノ心ニ成ハテタルさまヲいはんとテ、御祓そ夏のトイヘル也、風ノソヨク檐ノ葉ヲ秋ソト思ヘハ、御祓ヲするニテ夏ト知タル也、誠ニいつもアル詞ヲモチテ、珍シクしたてられテ、打吟スルニモ、涼シクナル心ノし侍ルニヤ、此百首ニモ新勅撰ニモ入ラレ侍り、心及ハス共、サル故アラントハ思フヘシ、猶詞姿タクヒナクコソ^{64ウ}

抄同前、三体詩、春半如秋心転迷ト云タルモ此心也

故前はハならノ木陰ヲ云也、非名所

九十九

○後鳥羽院諱尊成 高倉第四御子 母七条院種子 贈左大臣信隆女

治承四十七^{五イ}四年降誕 寿永二^{五イ}年八月廿踐祚^{四オ} 同三^{五イ}七月即位^{太政官序} 文

治五^{五イ}正三元服^{十二オ} 建久九^{五イ}正十一讓位^{十九オ} 在位十五年 承久三

七八於鳥羽殿御出家法諱良然 同十三日奉移隱岐国、^{延應}元二^{六オ}廿二

於隱岐国崩^{六十六オ} 同五月廿九可奉号顯徳院之^由 宣下 仁治三

七八以顯徳院可奉号後鳥羽院之由重被成 宣旨

続後撰十七雑中

題不知 後鳥羽院

99 人もおし人もうらめしあちきなく世を思ふゆへに物おもふ身は

抄此御哥ハ王道ヲカロシムルヨコサマノ世ニ成行事ヲ歎キ思食ス也、

人もおし人もうらめしトハ、世中ノ人ノ心さまノニテ治リ難キヲ

読給ヘルニヤ、又人独ノ上ニテモ、是ハよろしと思フ人ノ悪シキ

所^{65ウ}ノアル心也、よき所ハおしく、あしき所ハうらめしきヲ取合テ、

あちきなくトハよみ給ヘル也、又帝皇ノ御上ニ善悪ノ差別ハ有マシ

キ事ナレ共、天下ノ為ヲ思食故ニ、却テ是非ノ出来ルヤ、誠ニ世ノ

治リカタキ事ハ、君一人ノ御物思ヒナルヘキ事ニソ侍ラン、御秀哥

多キ中ニ、此御哥ヲ入ラレタル事、黄門ノ心侍ルナルヘシ、宗長聞

書云天下者非一人ノ天下、天下之天下也ト云心ヲ思フヘシ

抄是ハ世上ト云物、只よこさまナルヤウニナラテハ、人ノ心カナキ

物ト也、此心ハ人間力先爰ヲ能セント思ヘハ、却而悪事アル者也、

兎ニ^{66オカク}角二人間ハ不思物ト也、天下ノ為ヲ思召スニヨリテ、御身ヲ

思召ト也、天下者非一人之天下——ト云モ同心也

三人もおしの御哥、殊勝ノ御製也、後鳥羽院ハ安徳天皇不慮ニ西海ニ

テはて給ヒテ、後白川院ヨリ御位ヲ譲リ給ヒシ也、当御流後鳥羽院

御筋也——

三人モ惜ト^{オシ}ハ現在也、当時ノ人ノ心万差ニシテ難治義ヲ読給ヘル歟

三又なき人ヲ思召ス御心モアルヘシ、上代素朴ノ世ハ自天下モ治ル

也^{68オ}

三人モ枯シ世ハ世中ノ人取ニテ世モ治マリかたきを歎給ヘルニヤ、

天子ノ御身ニテハ、世ヲ我身ノ上ニ思召事ナレハ、其心ヲフカク読

給ヘル事也^{66ウ}

百 ○順徳院 諱守成 後鳥羽院第二皇子 母脩明院 贈左大臣範季女

正治二^{四オ}四十五立太子^{皇太弟} 承元四^{四オ}十一廿五受禪^{十四オ} 承久三^{四オ}四

廿讓位 在位十一年 同七月奉移佐渡国 仁治三^{六オ}九十二崩^{四十オ} 於佐渡

続後撰十八雑中

題しらす 権中納言国信 てる月の雲の影ハそれなからありし世をのみ恋わたる哉

此哥下私懷旧御哥也

順徳院御製

100 百敷やふるき軒はのしのふにも猶あまりある昔なりけり

百敷や此やの字、みよし野や・小初瀬やト云ニハカハル也」^{67オ}

此五文字百官よトアソハス義^云、テニヲハノ字也

○末ノ世ニナレハ、昔ヲ忍フハナラヒ也、彼仁^{古々序二}流秋津洲之外恵茂筑波

山之陰ト云如クナル世ヲ忍ハル、ハ、何故ソナレハ万民ヲ思召心也、

殊勝ノ御製ト也

卷頭ノ御製王道ノ心ヲ読給へり、又此御製同前也、上古ノ風ト当世

ノ風トノ姿カハレル也」^{67ウ}

慶安第二 抄之於

御前講之」^{68オ}